

---

# ピータバロ3 贗作者の技術（テクニク）

風梨凜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ピータバロ3 テクニク 贗作者の技術

### 【Nコード】

N2194M

### 【作者名】

風梨凜

### 【あらすじ】

表向きは名のある美術学校、裏では学校ぐるみの窃盗団のピータバロ・シティ・アカデミアの専属画家となったキース・L・ヴァンベルト。彼の前に差し出された1枚のフェルメールの絵。学内ではその絵の中には、観覧者の少年が入り込んでしまっていると、まことしやかに囁かれていた。キースは生意気だけど、アイドル並に可愛い、シティ・アカデミアの生徒、ミルドレッドと、この絵の持ち主の画商の館に出向いてゆくのだが……。

## Chapter 1 (前書き)

ピータバロ、ピータバロ2、12枚目の肖像画、番外編ミカエルへの哀歌、の続編です。

## Chapter 1

イギリスの小都市、ピータバロ。その町でも有数の金持ちのご子息・令嬢が学ぶ、美術学校、ピータバロ・シティ・アカデミア。

その超豪華な景観に逆らうように、質素さを保ち続けているアトリエで、キース・L・ヴァンベルトは、目の前に差し出された1枚の絵を、食い入るように見つめていた。

”ヴァージナルの前に座る婦人”

ピアノのような楽器の鍵盤に、そつと手をかけた若い婦人のたおやかなポーズ。こちらを向いた魅惑的な眼差しが、どきどきするほど艶かしい。画面の左下から差す柔らかな光が、青のドレスの襷ひだの上で、鑑賞者を誘うように、ちらちらと輝いている。

オランダ随一の画家、フェルメールの晩年の作品だ。だけど……

キースは、以前より、少しは小奇麗になった小麦色の髪をかき回しながら、アトリエの窓辺に立つ、ブルネットで眼鏡のセクシーな教師 - レイチエル - に声をあげた。

「以前、俺が見た”ヴァージナルの前に座る婦人”には、そんな少年の姿は描かれていなかったぞ」

その絵の中に、ヴァージナルの後ろで佇みながら、婦人を見つめている少年がいる。

「まさか、それって、今、学内で噂されてる、キャンバスの中に少

年が入り込んでしまってるって絵なんじゃ……?!」

女教師は、その言葉に意味深に微笑んだ。

「……で、ことの信憑性はさておき、フェルメールが、こんな少年  
つきの絵を描いた記録はどこにもないし、おまけに、フェルメール  
の”ヴァージナルの前に座る婦人”は、ロンドンのナショナルギャ  
ラリーが所蔵していて、今もそこに展示されているのよ」

……ってことはと、青年画家は琥珀色の瞳を瞬かせ、

「贋作！ その絵は”ニセモノ”ってことか」

だよなつと、彼の足元にいる相棒、垂れ下がった茶色の耳が可愛  
い中型犬 - パトラッシュ - に同意を求める。その相棒といえば、  
”そうだね”と言いたげに、くわんと小さく鳴き声をあげた。

「……で、今回、あなたにこの絵を見せた目的は……」

「分ったぞ。それと同じような贋作を、ここで俺に描かせる気なん  
だな！」

悪党め！

でも、シテイ・アカデミアっていう学校は、それを生業にしてる  
んだな。これが。

けれども、ブルネットの女教師は、ふんとそれをあざ笑い、

「こんなオカルトまがいの贋作を何枚も作って何になるっていうの。  
ただ、この絵の持ち主は、グレン男爵っていう、最近、手広く商売  
を広げている画商なんだけど……この絵をシテイ・アカデミアに預  
けるかわりに、“キース・L・ヴァンベルト”に会いたいと、あな  
たを指名してきたのよ」

「俺を指名？ その男爵が？」

グレン男爵？ どこかで聞いた名前だけど……  
けど、どうして、そいつが俺を知ってるんだ？

腑に落ちぬ顔をした青年画家に、女教師は、

「よくこの学園にやってくる、街外れの教会の神父。彼から、シテイ・アカデミアに腕のいい、お抱え画家がいるって、あなたの噂を聞いたそうよ」

キースは、そんなことだろうと思ったと、ちつと舌を打ち鳴らした。

聖職者とは名ばかりで、詐欺まがいの絵画売買や、悪魔被いなんてオカルトな仕事に手を染めてる、怪しげな神父。

「どうせ、また、あの胡散臭いエクソシストが、あらぬことを吹き込みやがったんだろ」

この青年画家と神父は以前に、幽霊の少女に頼まれた肖像画をめぐって、対決した間柄なのだ。といっても、後に、彼がピータバロ・シテイ・アカデミアと契約したことを知ってから、手のひらを返したように、友好的に態度を変えてきた最低の奴なのだけだ。

そして、美人でセクシーな女教師――レイチェル――は、頭が痛い思いの彼に、さらに頭痛の種を植え付けようとするのだ。

「グレン男爵はロンドンの郊外に豪華な屋敷を構えている。ただ、気をつけて欲しいのは、彼はどうも、中国の贋作村にも通じているという噂なの」

「中国の贋作村って……あの、一つの村がまるごと、名画の贋作作りをビジネスにしてるって悪名の高い？」

「そう、例えば、ゴッホやミレーは没後70年を超えているんで、このイギリスでは、著作権は消滅しているの。だから、その贋作村で、そのコピーをどれだけ作っても、法に触れることはない

わけ。と考えれば、仮にそのビジネスに介入できたとしたら、この学園にも相当な利益を得られるとは思わない?」

” ははあ、だから、この女教師は、そのグレン男爵の身边を俺に探らそうって腹なのか”

「何で俺が、そんなスパイもどきのことをしなくちゃなんないんだよ。贗作ビジネスの話がしたいなら、レイチエル、あんたが直接出向いて、そのグレン男爵とやらの話をすればいいじゃないか!」

ところが、ややこしいことに関わりたくない彼の思惑を、女教師はいとも簡単に一蹴する。

「駄目、駄目。先方は、この学園の裏の顔を知らないのに、中国の贗作村の話なんて、いきなり、私が持ち出したりしたら、怪しまれるだけじゃないの。そりゃ、こんなに短期間で財をなすなんて、グレン男爵って奴も胡散臭いことに足をつっこんでるに決まってる。いずれはこの学園の裏ビジネスの話もするつもりだけど、それは、もう少し、探りを入れてからの話ね」

美人だが、小ずるいことには、何処までも余念がない女。そうは思っても、今は逆らうことはできないんだ。キースは渋々、彼女の命令を聞き入れる羽目になってしまった。

苦勞するのはいつも俺。美味しい思いをするのはこの女。

けれども、やっぱり、ここは我慢、我慢か……。

キース・L・ヴァンベルトは、そばで寝息をたてている、相棒の中型犬、パトラッシュの頭をくしゃくしゃとなぜながら、深い息を一つ吐いた。

畜生! いつかピータバロ・シティ・アカデミアを俺たちのもの

にするために。



## Chapter 2

こざつぱりと整えた小麦色の髪と、黒のタートルネックにブラウンのブレザー。

シティ・アカデミアの正門の前で、キースは、レイチエルの手配したリムジンを待ちながら、こんなに小奇麗な身なりしたのは、従兄弟の結婚式以来だと、落ち着かない気分がした。

自分は、油絵の具の匂いがする上着と、膝の破れたGパン姿の方が、絶対、性に合ってるのに……。

3月とはいえ、この地方に春の日差しが差し込むのはまだ先のようで、街路樹の木々に芽吹いた緑の蕾とは裏腹に、風はまだ冷たかった。

「パトラッシュ、悪いけど、今日はお前を連れて行っちゃ駄目だつてさ」

足元で、不満げに丸い目を向けてくる相棒の中型犬に笑みを送る。その頭をなぜながら、キースは、まだ、自分が売れない画家の頃に根城にしていた、王宮美術館近くの露店の景色を思い出していた。

あの露店で絵を売りながら、俺は、いつかは王宮美術館に自分の絵を飾ってもらえるような画家になるのを夢見てた。それは、ほんの1年前のことだったのに……。その中の風景画を破格の高値で買ったシティ・アカデミアの生徒 - ミルドレッド - に、関わったばかりに、俺は、よりによって目出度いはずの17歳の誕生日に、こんな極悪な学園と契約する羽目になってしまったんだ。

“ピータバロ・シティ・アカデミアを変えたいの、だから、ここに

来て！ 私たちに力を貸して”

普段は、クソ生意気で小ざかしいお嬢様のミリーの真摯なお願いに、ついその気になっちまったけど、本当に、あのレイチエルからシティ・アカデミアの全権を奪い取るなんてことができるんだろうか。

ふうと深い息を1つ、吐き出す。

するとその時、いかにも贅沢な黒塗りのリムジンが彼らの前に停車したのだ。

「あら、キース、綺麗にしてると、そこそこ見れるようになったじゃないの」

その中から、アイドル並に可愛いが、言葉は辛辣な12歳・ミルドレッド・が顔を出した。軽くウェーブした黒の髪が肩で揺れ、瞳は漆黒に輝いている。

「ミリー？ 何でお前がその車から顔を出してんだよ！？ それに今、授業中だろ」

「レイチエルに頼まれたのよ。グレン男爵の館に行くんでしょ？ キース一人じゃ、やっぱり頼りないんじゃないかって」

っていうか、こちらからアピールしたんだけどね。彼と二人で外出なんて、こんなチャンス、めったにないもん。

着いてゆく気満々で、意気込んでいる小学生に目をやり、若手画家は、そりゃそうだけど……と息をついた。

ミルドレッド - 通称ミリー - の父親は、欧州でも有数の実業家で、それに加え、凄腕の画商でもあるのだ。そのせいか、この娘はまだ小学生だけど、絵を見ることにかけては、ものすごい審美

眼を持っている。

仕方ないかと、キースは名残惜しそうな足元の相棒の頭を一撫でしてから、

「パトラッシュは、今日は留守番。たいしたお土産はもって帰れそうにないけど、後はよろしく頼むな」

と、リムジンの扉を開き、その中へ乗り込んでいった。

シテイ・アカデミアの正門から黒塗りのリムジンが去ってゆく。その後姿をしばし眺めてから、

何で相棒の僕を置いてゆくんだよ！

パトラッシュはそう言いたげに、くわんと一鳴きすると、全速力でその後を追いかけていった。

\* \*

通り過ぎてゆく様々に姿を変える街並や、川にかかる古い橋。

曇りが定番のブリティッシュな空は、珍しく、青く澄み渡っている。

うふつ、こうやってると、二人で気楽なドライブを楽しんでるみたい。

たわいのない世間話を青年画家と交わしながら、ミルドレッドはご満悦な笑顔を浮かべた。とはいっても、彼らが乗っているのは運転手付きの超豪華なリムジンなのだが……すると、

「それはそうと、グレン男爵って美術界ではそんなに有名なのか」突然、キースがそんな風に話題を切り替えてきたのだ。

「さあ、うちの家と昔からお付き合いしている名家ならまだしも、成金の画商のことなんて、私はよく知らないわ。あつ、そうそう、名家といえね……」

ミルドレッドは、女王様が家来に向ける眼差しで、青年画家を見つめ、

「アラブの王族から私に招待状が来たのよ。息子の誕生パーティに、是非お越し下さいって。ロンドンのアートフェアで、彼が私を見初めて、是非、お付き合いさせていたきたいって」

「はあ？ ミリーに？ アラブの王族が？ ……で、その息子って幾つなんだよ」

「えっと、確かキースと同じで17歳だったかな」

同い年の王族の登場だもん。これで、少しはこいつも焦るかも。

期待を込めて、隣の青年に漆黒の瞳を向ける。だが、

「変な野郎だな。そいつ、ロリコンじゃねえの。お前、気をつけといった方がいいぞ。けど、こんな”色気のない子供”<sup>ガキ</sup>にお付き合いだなんて信じられないな」

”色気のない子供<sup>ガキ</sup>！”

その信じられないくらい不仕付けな表現に、ミルドレッドは、ぷうつと頬を膨らませた。学内の男子の間では、引く手数多な私なのに……と恨みの籠った視線を隣に送る。けれども、そんなことには知らぬそぶりのキースを睨めつけ、こんな無神経な貧乏画家に、王族なんて話題、振るんじゃないかと、彼女は心底後悔するのだった。

そうこうしているうちに、キースとミルドレッドを乗せたリムジンは、豪華な作りの門をくぐって、グレン男爵の館へと向かってい

った。

\* \*

緑の森のその先の、そのまた奥に聳え立つグレン男爵の館は、キースが想像していたより、はるかに大きく、豪華で、そして悪趣味だった。

「いくら金があるったって、ここまで自己主張が激しいと、見ている方が嫌になっちゃうな」

と、眉をひそめた青年画家に、

「そりゃそうでしょ。ほら、あのゴテゴテした赤煉瓦の外壁、柱の魔物とか怪獣っぽい彫刻。この館は、”ジャコウビアン”っていう「悪趣味の時代」と呼ばれたルネサンス時代の建築様式で建てられている。それが、一目でわかるもん」

「毎度のことだけど、ミリー、お前のポケットってどうでもいい蒔蓄が沢山詰まってるよな」

呆れたように顔を覗き込んでくる、彼の琥珀色の瞳。

だめ、だめっ、これに翻弄されて、毎回、私は馬鹿みたいな目に合わされてるんだから。

ハイソサエティな小学生、ミルドレッドは、つんと口を尖らせ、「どうでもよくないわよ。芸術に関わる仕事をしたのなら、このくらいはあたり前！ キースのポケットは、いつも破れてるんで、絵の具以外のことは、全部、外に出ていっちゃうんでしょ」

一度、火がつくと、ミルドレッドの説教はなかなか止らない。芸術論とか、美術史とかには、全く興味がない絵描きの青年は、「分かった。分かったけど、その話は後にして……」

……が、その時突然、館と隣接した庭園に目を向けた。枝葉を広げたミズキの下から、誰かがこちらを見つめている。

「キース？ どうしたの」

不審げに問いかける少女に、

「あの木の下で黒服」

「黒服？」

だが、その言葉が終わらないうちに、黒い影が庭園の奥へと散らばっていった。

そういえば、昨日、レイチェルから聞いた話の中に……

” グレン男爵は中国の贋作村に係わっている。

これだけ短期間に財を成すなんて、普通の商売をしているとは思えない”

って、そんな話が出ていたな。

「ミリー、気をつけろよ。ここってかなり胡散臭い場所かもしれない」

キースは、神妙な声でそう言うと、不審げに瞳を向けてくる少女を自分の近くに引き寄せるのだった。

## Chapter 3

「今日はよくお越しくださった。イギリスでも名だたる名門校、ピターバロ・シテイ・アカデミアが推薦する若手画家のあなたに会えて光栄ですよ」

グレン男爵は、“悪趣味の館”の主とは思えないほどの、柔らかな物腰のロマンズグレーの紳士だった。てっきり、油ぎった成金親父だろうと想像を膨らませていたキースは、少し拍子が抜けてしまった。

「すごい、これって、ヤーコブ・ファン・ロイスタールのオリジナル？ あっちは、カミュー・ピサロ！？」

感嘆の声をあげながら、館の壁という壁に所狭しと掛けられた絵を見て、ミルドレッドが黒い瞳を輝かせた。そんな少女に、館の主は、にこやかな笑みを浮かべて言った。

「おや？ こちらは、カーンワイラー家のお嬢さんではないですか。先にあったアート・フェアでお父様と一緒なのを見かけましたよ。なるほど、シテイ・アカデミアの生徒さんでしたか。どおりで絵に詳しいわけだ。おまけに、お可愛らしくていらっしやる」

わざとらしい社交辞令を小学生相手に使いやがって……と、キースは白けた表情をする。

社交辞令は社交辞令で返しますと言わんばかりに、お愛想笑顔を振りまく、ミルドレッドと男爵の会話についてゆけず、キースは館の壁にかけられたロイスタールの絵をよく見ようと、その近くに歩み寄っていった。オランダでも屈指といわれた風景画家の絵。ところが、

「この絵……」

その“名画”を一目見るなり、眉をしかめた若手画家に、

「そのロイスタールがどうかしましたかな」

グレン男爵は、小気味よさ気な笑みを浮かべたが、キースはきつい眼差しで彼に宣言した。

「贋作だろ」

「……ほお、随分、思い切ったことを言われる。私は今では、ロンドンで、ちよつとは名の知れた画商のつもりですが、その私が収集した絵が贋作とは」

突然の指摘に戸惑うでもなく、にやついた笑いを浮かべる男爵がいかに胡散臭い。

お前が中国の贋作村に通じてるっていうのは、もうお見通しなんだぞと、キースは、

「このロイスダールの絵の右下に記してある、彼のイニシャル“VR”の“組み合わせ文字”<sup>モノグラム</sup>の字柄が、以前、俺が図録で見た物と違っているんだ。例え、図録で見ただけでも、俺は一度見た絵のモノグラムを絶対に見間違えたりしない」

「なるほど、しかしね、あなたくらいの若い人が、そういう指摘を迂闊に口に出さない方がいい。今の私とその気になったら、若手画家の一人くらいは簡単に欧州の美術界から抹殺することだってできるのだから」

穏やかな口調のわりには、男爵の台詞は酷く傲慢だった。当の若手画家はぐつと言葉を飲み込んだが、成金男爵の何十倍もセレブな小学生が、こんな時に黙っているはずがないのだ。

「いくら手広く商売してるっていったって、たかが一介の画商が、



馬鹿言うんじゃないわよ！ そんな事をするっていうんなら、私はお父様に頼んで、この家を徹底的に叩き潰してやるんだからっ！！」

男爵は、そんなミルドレッドの剣幕に眉をしかめたが、次の瞬間には、うって変わって愛想の良い笑みを浮かべ、

「お嬢さん、今日は、うちの料理自慢の料理長が、特製のタルトを焼いたそうで、ちょうど、お茶の時間だ。あなたはお先に行って、お味見されてはいかがですか」

「え？ でも、私もここで話しろって、レイチエルから……」

「大丈夫。私が今から、ヴァンベルトさんとするのは、名門校のお嬢さんには、役にも立たないようなつまらない話ですから」

と、有無をいわさぬ強引さで、彼女を部屋の外へと追いやったのだ。

## Chapter 4

贅をつくした館の応接間に、奇妙な沈黙の時間が流れてゆく。まだ、金持ちな連中と付き合うのに不慣れなキースは、場を取り繕うこともできず、仕方なしに壁に掛けられたロイスダールの絵を眺めていた。すると、

「さすがですな。あの絵を贋作と見破るとは。今日、あなたの才能を見込んで、ここに来ていただいたのは、間違いではなかったようだ」

突然、態度を軟化させたグレン男爵に、かなり慌ててしまった。

「え……？ でも、俺、あんたみたいな画商に、見込まれる程の有名画家でも何でもないんだけど」

「君のことを私に教えてくれたのは町外れの教会にいる神父だよ。あの男はいかにも胡散臭い奴だが、確かに靈感のような物を持っている。実際に私は彼の交霊術によるお告げで、いくつかのオークションを成功させているんだ」

「交霊術……？ また、胡散臭いことを……止めてくれよ！ あのエクソシストの神父となんて、俺は関わりたくもないんだよ」

案の定、話が、またおかしな方へ向かっていきやがったと、胸に悪い予感がよぎってゆく。俺って、やっぱり、不幸な星の元に生れついてしまっているのかもしれない。

今にも回れ右をして、館の中から出てゆきそうな若手画家。すると、男爵は、

「待ってくれ！！ 去年のクリスマスに君は、幽霊の少女に頼まれて、その肖像画を描いたんだってね！ それも、あの神父でも、コンタクトを取るのに失敗した気難しい少女の霊の」

「少女の霊……？ それって、アンナのことを言ってるのか？」

アンナは、古い洋館に佇んでいた白いタフタのケープと赤のドレスが可愛かった女の子だ（ただし、幽霊）。それにしても……

「冗談言つなよ。アンナが気難しい霊？！ それなら、この世にさ迷ってるほとんどの霊は悪霊だよ！」

その台詞が、グレン男爵をさらに喜ばすことになってしまったのだ。

「ああ、やっぱり、君は霊的な力を持っているんだね！！ 有り難い。どうか、そのまま、私の話を聞いてくれ！ この願いが叶ったら、相当な礼はするつもりだ。望むのなら、私は君たちの学園に、中国の贗作村の覇権を譲ってやってもいい！」

俺に霊的な力？ こいつ、何言ってるんだ？！

こいつ完全にイカレてるぞと、思うと同時に、館の主の口からこぼれ出た”贗作村”という言葉に、キースは驚いてしまった。確か、レイチエルは、まだ、グレン男爵にうちの学園の裏家業や、贗作村の話を持ち出すのは早いって言ってた……それだから、彼女は、俺をスパイもどきにこの館に潜入させたんじゃないのか……。

## Chapter 5

そんな彼の気持ちを読み取ったように、グレン男爵は人の悪い笑みを浮かべた。

「私が、ピータバロ・シティ・アカデミアの裏の顔を知らないとしても、思っていたのかい？ これでも、私は裏と表と両方の社会に通じている。君だって、それを承知で、私の招きに応じたんじゃないのかね。ならば、取引とゆこうじゃないか。これは、君たちにとっても、決して悪い話ではないと思うが」

再び蘇ってきた男爵の傲慢顔が、癪に障る。

こいつ、金を積めば、この世に、できないことはないと思ってんじゃないだろうな！？」

「別に俺はあの学園に何の恩も感じてないし、ましてや中国の贋作村なんて、興味の対象にもならないよ！」

すると、それがよほど意外だったのか、先ほどまでとうって変わって、男爵はひどく戸惑った表情をした。

「なら、君はどうして、この館へやって来たんだ？」

むつつりと黙り込んでしまった青年画家。その様子に目をやって、豪勢な館の主は深い吐息をもらしたが、

「なら、この条件なら、どうだろうか」

と、おもむろに部屋の片隅に置いてあった、額縁を手にとって、それにかかる白布を取り払った。

キースは、その瞬間、自分の目を疑ってしまった。

「それって、アンナの！？」

グレン男爵が、彼に掲げて見せた1枚の絵。

クリスマスツリーの下で微笑んでいる、白いケープと赤いドレスの女の子。

絵の下につけられたタイトルは、“ アンナ 11歳 1970 ”

「まさか、それって、本当のアンナの“ 11番目の肖像画 ”なのか！？」

そうか！ グレン男爵っていう名前をどこかで聞いたと思っていたら……

それは去年のクリスマスのこと。

12歳になる前に亡くなったアンナは、古い洋館に、画家の父親に誕生日ごとに描いてもらった11枚の自分の肖像画を飾り、“ 12番目の肖像画 ”を描いてくれる画家を探して、この世をさまよっていた。

そして、キースが完成させた“ 12番目の肖像画 ”だけを置いて消える時に、彼女は、こんな事を言い残したのだ。

“ この館にかけられた11枚の肖像画は、実は幻なの。本物の中の1枚は、グレン男爵っていう画商が持っているみたいんだけど、他の絵は、別々に収集家たちに売りさばかれてしまったらしいの。そんな商売に、私の肖像画を利用されるのは絶対に嫌！ だから、探して。そして、集めて。私は私の12枚の肖像画をキースに持っていて欲しい。それが私の最後のお願い！”

言葉が出ない様子の青年画家を見て、男爵はほくそえみ、

「もし、君が私の依頼を受け入れてくれたなら、この絵は無条件に君に進呈しよう。けれども、これは、ほんの手付けだよ。もし、私の願いが叶った暁には、鷹作村の件も私は喜んで君たちに譲り渡す覚悟がある」

「だ・か・ら、俺はそんな村には興味がないって……！」

ところが、そんな彼を制して、

「そんな事を言っているのかな？ あの手父から聞いたんだが、ヴァンベルト君、君はその幽霊の少女の肖像画に随分、ご執心のようなね。実はね、私は私が取り仕切っている中国の“贗作村”の中で、この少女の別の肖像画を見たことがあるのだよ」

「えっ」

「2、3枚は目にしたかなあ。確かにその絵には“アンナ”の名と“その年記”が記してあった」

ち、ちょっと待ってくれよ……それって、俺が探しているアンナの肖像画のうちの何枚かが、中国の贗作村にあるっていう事……なのか！？

すると、グレン男爵は、してやったりと、

「どうだい？ ようやく、君も私の言う事に耳を傾ける気になってきたんじゃないのかい？」

と、人の悪い笑みを頬に浮かべるのだった。

## Chapter 5 (後書き)

\* \*

キースと幽霊のアンナのエピソードを詳しく知りたい方は、『ピータバロ2』12番目の肖像画』をご覧ください。

## Chapter 6

とびきり豪華な館の、最高級の壁掛け時計の音が、いらつく音を奏でてくる。気をつけなきゃ、このグレン男爵ってやつは、相当な食わせ者だぞ。

ところが、その男爵は、

「私は君がこの館に来てくれた事に本当に感謝している。これから私がする話は、普通の者なら、多分、つまらないゴシップネタか、それでなければ、ていのいいオカルト話にしか聞こえないと思うが……」

と、いやに神妙な顔つきで、告白を始めたのだ。

「実は、あのフェルメールの絵に入り込んでしまった少年は……私の息子なんだよ」

うわあ、そうきたか！ と、キースは頭を抱えなくなってしまった。真正面からそんな話題を突きつけられるとは思ってもみなかった。ほんとうにこのまま、回れ右でも左でもして、家に帰ってしまいたい。けれども、男爵は、

「息子が家に籠りきりになってしまったのは、私と前の妻が離婚を決めて間もない頃だった」

と、キースが聞きたくもない、彼の身の上話を始めてしまった。

「半ば無理矢理に懐いていた母親から引きななしたのが悪かったのか、あの子は随分、落ち込んでいてね……好きな絵にでも気持ちに向ければ、気分も良くなるだろうと、私は考えたんだよ。その時、私が見せたフェルメールの作品集の中であの子が目にしたのが、妻と良く似た女性が描かれていた、”ヴァージナルの前に座る婦人”だったんだ。あの子はその日から”ヴァージナルの前に座る婦人”



の虜になってしまった。それだから、私は描かせたんだ……私が贋作村で一番、目をかけていた贋作師にあの”絵”を。息子へプレゼントとして」

「その贋作師が描いた絵をあなたの息子は、本物のフェルメールの絵だと思いこんだんだ。でも、そうだとすると、何であんたの息子がその絵に入り込んでしまったんだよ」

すると、グレン男爵は、ひどく苦い顔つきでこう言った。

「魔がさしたとしか、今は言いようがないのだが……その贋作はあまりにも出来が良すぎたんだよ。だから、つい私は、商売気を出してしまつて、あの贋作を本物と偽つて、あまり美術に詳しくない金持ちにそれを売り渡す契約を結んでしまったんだ」

金のためなら、息子がお気に入りのおもちゃ”でも奪い取るつてか？ やつぱり、金持ちつて奴には、ろくな人間がいないなと、キースは気分が悪くなつてしまった。

「だいたいの展開が読めてきたぞ……で、その贋作を本物の”ヴァージナルの前に座る婦人”だと信じ込んでいる、あなたの息子は、母親に似た絵の中の婦人と別れたくないばかりに、追慕の情に追い立てられて、キャンバス中に入り込んでしまった。あなたの言つたオカルトっぽい結果がこれだったんだ」

……が、

”けれども”と、前置きしてからキースは声を大にして言った。

「そんな話、信じてたまるもんか！」

ところが、”今度こそ俺は帰るぞ”と踵を返そうとした彼の手をはがしりと手にとり、男爵は声を高めて言った。

「あの神父には、この話は秘密なんだ。いくら、靈感があっても、あいつは信用がならない。だから、私が頼れるのは君くらいしか、いないのだ。息子をあの絵の中から出してやつてくれ！！ 私は、あの子が手元に帰ってきたら、財産も地位も名誉も、すべて放棄する。後悔してるんだ……馬鹿げた金儲けビジネスに感けて、私は一番大切な者を失ってしまった。だから、お願いだ！！ 頼む！！」

うるうるした男爵の瞳と、安物のメロドラマみたいな台詞に思わず後ずさりしそうになる。

「そ、そんなこと言われても、俺は霊媒師でもオカルト研究家でもない、ただの画家なんだぞ」

「気難しい幽霊の少女とコンタクトを取れたほどの君なら、できるいや、私はできると信じてる！」

面倒事がいつも当たり前のように、頭の上から降ってくる。

キース・L・ヴァンベルトという青年は、やはり、そういう運命に生まれついているらしい。

すったもんだのやり取りを繰り返した後に、結局、キースの手には、グレン男爵から無理矢理、献上された”アンナの肖像画”と、”彼の息子を絵から出してやるという依頼”が委ねられてしまった。

\* \*

「ふうん、酷い目にあってるかと思いきや、私がキッチンでタルトをご馳走になっている間に、男爵がそんな面白い話をしてたなんて、その場にいられなかったのが、本当に残念！」

グレン男爵からやっと開放された後に、リムジンが待っている駐車場まで歩く道すがら、キースの話を聞いたミルドレッドは、不満げに唇をとがらせた。

「よく言うよ。俺が四苦八苦していたっていうのに、ミリーは、そんな事を考えもしないで、甘いお菓子に舌鼓を打ってたんだろ」  
「あら、さすがに超一流のシェフの手作りは美味しかったわよ。ああ、そういえば、忙しそうだったんで、キースの分も私が食べておいてあげたから」

どうせ、私は”色気のない子供<sup>ガキ</sup>”だし、こうでもしないと腹の虫がおさまらないわ。

と、ミルドレッドは冷ややかな視線を彼に注いだが、

貧乏画家の分まで食うなんて、それが、セレブなお嬢様のやる事かいっ！ と、キースは、呆れた視線を、隣りの少女に投げ返すのだった。その時、彼の目の中に、森にうごめく黒い影が映し出されたのだ。

また、黒服……確か、館に入る前にも……。

その瞬間、怒号のような叫び声が響いてきたのだ。ぞくりと悪寒がキースの背中を通り過ぎていった。その直後に、

「ミリー！ 避ける！！」

咄嗟にそばにいるミルドレッドを思い切り突き飛ばして、自分も身を伏せる。すると、頭上すれすれを鉛の弾がかすめていった。

「な、何っ、何なの！」

「知るかつ、でも、確かにあいつら、俺たちを狙って撃つてきやがった」

地面に這いつくばるようにして、ミルドレッドを手で招きよせ、そのままのスタイルで、とりあえず、弾を避けれそうな建物に身を

隠す。

いったい、何が起こってるんだ？！

彼らが隠れた場所は、館の近くに立てられた賓客用の別館のようだったが、その白亜の建物の白さが、隠れるには目立ちすぎると、キースの心臓は早まる鼓動を抑えきれなくなってしまった。

少し離れた先から、再び流れてくる悲鳴。

いくら、彼らが所属するピータバロ・シティ・アカデミアが、絵画泥棒の裏家業を持っていたとしても、ピストルの弾が飛び交うような血なまぐさい事件に関わったなんて話は聞いた事がない。ましてや、一介の専属画家のキースや、ただの生徒のミルドレッドが狙われるなんて覚えは絶対にない。

「やっぱり、あのグレン男爵って奴、相当に危ない橋を渡ってきてるんじゃないのか」

無理矢理に息を整え、辺りを一通り、見渡してみる。

黒服の姿は見えない。

「ミリー、こつち！」

とりあえず、建物の中の方が安全だろうと、キースはミルドレッドの手を引いて、別館の裏口へと駆けて行く。けれども、そのまま、凍りついたように身動きしなくなってしまった。

「キース？」

訝しげに彼の後ろから、その先を覗き込もうとする少女。だが、

「ミリー！ 見るんじゃない！！」

普段とは違って変わって、声を荒げた青年の態度に酷く驚かせれてしまったのだ。



## Chapter 7

「キース、どうしたっていうの?! 何があつたの」

自分を後ろに追いやつたまま、口元を押さえて別館の壁にもたれかかったままの青年。ミルドレッドはそれを訝しがり、彼の手を振りほどこうとしたが、キースはがんとして、その手を離そうとはしなかった。それもそのはず、

喉元を刃物で切られて、別館と中庭の路地に転がっている黒服……。

地面に広がった大量の流血。

あんな物を絶対に、ミリーに見せれるもんか!!

何とか気持ちを取り直して、真っ直ぐに立とうとする。ところがその時、再び、彼らの視界の中に、怒号のような叫びをあげて、こちらに駆けて来る数人の別の黒服の姿が、入り込んできた。

言ってる意味は、さっぱり分らないが、抑揚の強い外国語……キースはその言葉をつい最近、耳にした覚えがあつた。確か、深夜の映画劇場でみた、東洋のギャング映画……。

これって中国語か!?

そういえば、グレン伯爵は、”中国の贗作村”でヤバイ事業を……そして、最近、ロンドン界隈で起こっている連続殺人事件。

その瞬間、かなり危険な状況がキースの頭に浮かび上がってきたのだ。

「ミリー、逃げろ! こいつら、チャイニーズ・マフィアだ!」

日本のヤクザなんかより、ずっと、簡単に人の命を奪う犯罪組織。そりゃそうさ、中国っていえば、13億も人口があるんだ。奴らにとっては、人、一人の命なんて軽いもんだろ！

「何で、私たちがチャイニーズ・マフィアに襲われなきゃなんないのよ！」

「そんなの、俺が理由を聞きたいくらいだよ！！」

とにかく、逃げなきゃ命はないと、黒服のいない場所を目指してキースとミルドレッドは全力疾走する。きっと奴らは仲間を殺されて、怒りまくってるに違いない。

二人は、形振り構わず、別館から飛び出して中庭に向かった。そこを横切って、緑の林を抜ければ、リムジンが待つ駐車場に出るところができるはずだった。

……が、

「逃？也徒？、来到？？！」

脇道から突然現れた黒服に、キースは二の腕をがしりと掴まれてしまったのだ。言葉がわからなくなつて、（逃げても無駄だ。こちらへ来い！）と、言ってるくらいは、彼にだって察しはつく。

先を走っていたミルドレッドが、その異変に気づき後ろを振り向いた。

「構わないから！俺をおいて逃げろ！！」

その瞬間に少女の表情に、何とも言えない不安と戸惑いが交じり合った。

「ミリー！いいから、さっさと行くだっ！！」

キースのいつにない剣幕と恐怖感に後押しされて、ミルドレッドは声も出せずに、脱兎のごとく駆け出した。どこからともなく、わらわらと現れた黒服が、少女の後を追ってゆく。

その後姿を心配げに見つめながら、チャイニーズ・マフィアに捕

えられた青年画家は、強く唇を噛み締めた。頭のこめかみに当てられたピストルの銃口が冷たすぎる。

カチリと引き金を引く音。

冗談じゃないよ。こんな所で、理由も分からず、撃ち殺されちゃうなんて！けど……、

万事休すか！？

ところが、たまらず瞼をぎゅっと閉じたその時、

“わぉん！！”

と、聞きなれた声が、彼と彼を捕えた黒服の頭の上から響いてきたのだ。とたんに目の前が真っ暗になる。

死んだのか？　と思いきや、中庭の小道に倒されたキースの頬に、ぺろりと暖かい感触が通り過ぎていった。そっと、目を開けてみる。すると……

「……パトラッシュユ？」

目前にいる茶色と白毛の中型犬。黒い瞳がくると嬉しげに輝いている。驚いて隣に目を向けると、寸でのところで、彼の相棒に飛び掛られ、下敷きの憂き目にあった黒服が失神状態で路上に転がっていた。

「……でも、何で、お前がこんな場所に……！？」

シテイ・アカデミアがあるピータバロ市は、ここから車でだって、1時間近くかかるっていうのに。



けれども、パトラッシュは、

“くわん”と、一声吠えてから、近くに止まっていた軽トラックの方に鼻面を向け、得意げに尾を振った。

「まさか……お前、あの軽トラックをヒッチハイクして、ここまで着いてきたって言うんじゃないだろうな?!」

しかし、そんな漫画みたいな話があるもんかいと、にわかに信じ難い顔の飼い主に、彼の相棒の中型犬は、

“くわん”ともう1度、元気な声をあげてみせた。

\* \* \*

一方、理由もわからず、キースに促されるままに逃走したミルドレッドは、四方をチャイニーズ・マフィアの黒服に囲まれて、絶体絶命の状態に陥っていた。キースは大丈夫なのかという心配と同時に、自分だってどうなるかわからないという不安が心に湧きあがってくる。

あと、少し走れば、リムジンの止めてある駐車場へ行けるのに……

悔しげに辺りを見渡してみても、広すぎる敷地の林の向こうに見える、グレン男爵の館までは、ここの騒ぎは聞こえないのか、助けがくる様子もない。

チャイニーズ・マフィアなんか誘拐されたら、そのまま香港やマカオとかに売り飛ばされるか、それとも、莫大な身代金をパパから奪った後に、殺されてしまうか……そんなの絶対に御免だわ!

逃げなければという気持ちと裏腹に、状況は彼女に絶対、不利になりつつあった。

黒服の手がミルドレッドに伸びてくる。

誰か、助けて！

……と、その瞬間、目が覚めるような鮮血が彼女の前に飛び散ったのだ。

驚きで声も出ない少女の腕を、咄嗟に背後から引く強い力。

そして、前のめりの姿勢から、路上に倒れてゆく黒服の姿に向けられるミルドレッドの視線を遮るように、黒い車体が割り込んできた。

けたたましい空冷直列4気筒のエンジン音。

黒い曲線を描いたボディと、その車体の側面に書かれた文字は、

KAWASAKI ZEPHYR 1100（カワサキ ゼファー  
1100）

日本製のバイク？！

だが、ヘルメットを取り、啞然とするミルドレッドに視線を向けた、そのライダーの髪は、深い亜麻色。そして、赤みがかった瞳の色は、この世のものとは思えぬ悲哀を秘めた灰色をしていた。

## Chapter 8

ミルドレッドは突然の流血劇に驚き、息をつく間もない。突然、彼女の視界が黒いヘルメットで遮られたのはその時だった。

「ちょ、ちよつと、これ、何のつもり!?」

その質問には答える気もないのか、彼女にそれを被せたゼファール1100に乗った男は言った。

「死にたくないなら、さっさと乗れよ」

「……」

死にたくないわよ。でも、こいつもかなり危い……。

けれども、次々に黒服が近づいてくる。迷ってる暇なんかあるもんかと、ミルドレッドは、彼女の頭にはかなり大きめのサイズのヘルメットをつけたまま、ゼファールの後部座席に乗った。その瞬間、「しっかり、つかまつてる!」

と、ライダーの男はアクセルを回し、そのバイクのギアを上げた。そのまま、エンジン音を吹き上げながら、黒服のチャイニーズマフィアに突進してゆく。

もうもうと吹き上がる砂煙。その中にバイクの姿を紛れ込ませて、遠慮なく正面から撃ち込んでくる黒服からの銃弾を、車体を倒して避けながら、彼らの背後に廻る。

あやうく、後部座席から落ちそうになって体を傾けた、ミルドレッドに、乗り手の男は声を荒げた。

「バイクの重心を変えるな! お前は荷物みたいにまっすぐ座つていろ」

「荷物つて失礼な……」

……が、少女がその台詞を言い終わらないうちに、「?!?!」

その場の空気を引き裂くような幾つもの中国語の悲鳴が響いてきたのだ。すっぽりと被せられているフルフェイスのヘルメットのせいで、その様子は具には見ることはできない。けれども……、

バタバタと、目前で倒れてゆく黒服。そして、足元に飛び散ってきた生暖かい感触。バイクから振り落とされては堪らないと、しっかりと前にいる男の腰にしがみついたものの、ヘルメット越しに、ミルドレッドが垣間見た光景は、生のサスペンス映画みたいだった。

ゼファー1100のスピードに合わせて、切り裂いてくる?!  
手にしたナイフで?!

ぞっと、背筋に冷たいモノが通り過ぎてゆく。  
そういえば、今朝のタブロイド誌にこんな記事が……

“切裂きジャックの再来か?! 今、ロンドンに横行する連続殺人事件”

その見出しが、ミルドレッドの脳裏を稲妻みたいに通り過ぎていった。

ちよ、ちよっと待つてよ。……もしかして私……その切裂きジャックのジュニアだか何だかわからない奴の後ろに乗ってるの?

これって、もしかして、チャイニーズ・マフィアなんかより、ずっと危ないんじゃない!!

「もうっ! キース!! どうにかしてーっ!!」

けれども、そんなミルドレッドの雄叫びは、けたたましいバイクのエンジン音がかき消してしまった。

やがて、一通りの黒服が倒れて動けなくなってしまったのを見極めたライダーの男は、ナイフをブーツに装着した鞘にしまい、ゼフ

アーをくると回転させてから、ヘルメットの少女を乗せたまま、一気に通用門の方向へそれを爆走させていった。

歩きでゆうに30分はかかりそうな通用門への道を5分もかからずに走りつめてしまう。すると、普段、閉じられている通用門が、不自然に外へ大きく開かれているではないか。門の手前に大の字になって倒れている守衛に目を向け、ミルドレッドは、もうやけくそ気分で、バイクの男に問いかけてみた。

「あの守衛もあなたが殺ったの?！」

ところが、

「冗談じゃない。あれを殺ったのは、黒服の方だ」

「どっちだって一緒よ! みんな、頭がどうかしちゃってる!!」

男の背中が小刻みにゆれている。ミルドレッドのその台詞がよほど可笑しかったのか、ライダーの男はしばらく、背中で笑いながら、彼女を後ろに乗せたまま、ゼファー1100を街外れの方へ走らせて行った。

\* \*

パトラッシュと共に、駐車場に待機していたリムジンの場所へたどり付き、とりも直さず、それに乗りこんだキースは、ピータバロ市へもどる道中で、携帯片手に向かって苛立った声をあげた。

「……だ・か・ら、グレン男爵の館には、所狭しとチャイニーズ・マフィアがいて、訳もわからず、銃弾を撃ち込んできたんだ!! それに、ミリーの姿がどこにも見えない。おまけに館の庭にはマフィアが、バタバタ倒れてて、辺りは真赤な血の海だ。レイチェル、あんた、何で、あんな危ない場所にミリーを行かせたんだよ。あいつの親は、シティ・アカデミアのPTAの中でもとびきりのお得意

様だって、いつも言ってるくせに、彼女に何かあったら、どう責任とるつもりなんだよ!!」

彼の隣で相棒のパトラッシュは、耳をぴんと上にあげて、その声に聞き入っている。

そんなやり取りの後で、携帯電話から返されてきた答に、キースは業をにやしたかのように声を荒げた。

「先にグレン男爵にコンタクトを取るから、警察やミリーの親には絶対に何も話すなって?! ふざけんなよ! そんなに、あんたはシテイ・アカデミアのビジネスとかが大事なのかよ!」

けれども、携帯電話の向こうから聞こえるアルトな声の主・女教師、レイチエル・の答えは、いつものことながら、あくまでも淡々と冷たかった。

ツイッターと手の中で、切れた携帯電話がム力つく音を奏でている。こんな状態になってまで、あの冷酷な女教師の命令を聞く必要なんかないんだと、思わず、乗っているリムジンから外へ飛び出てゆきたい気分になる。……が、その時、

「……?」

再び、キースの携帯から呼び出し音が響いてきたのだ。”一体、誰だ?”と、訝しげに携帯に目を向ける。そして、液晶画面に表示されたその相手の名前を確認した瞬間、

「もしもしっ、ミルドレッドかつ?!」

彼は、そんな、すつとんきょうな声をはりあげてしまった。けれども、携帯から聞こえてきた小学生の声は、

「ハイ、キース。今、私、お食事中。超豪華なレストランでランチなの」

想像していたのとは、裏腹に、えらく機嫌が良かったのだ。

## Chapter 9

「ミ、ミリー、お前っ、今、どこにいる?!」

「えーとね、ピータバロ市まで、バイクであと30分くらいの小綺麗な町なんだけど、寄ってきやなんない場所があるんだって。そこで一休みして、多分、シティ・アカデミアには夕方にはつけるだろうって」

もぐもぐと、美味しいランチをほおばりながら、しゃべるミルドレツドの声がすごくウザったい。おまけに、

「バイク?」

今の状況に全然、繋がらない言葉に、キースには、彼女の言うてる意味が、さっぱり理解できなかった。次に継ぐ言葉が見つからず、しばらく無言でいると、再び、少女の声が携帯電話の向こうから響いてきた。

「ちょっと寄り道してくるけど、私は無事だし、安心して待っててよ。あ、それと、イヴァンが、キースが男爵からもらった女の子の肖像画をちょっとだけ見たいんだって。だから、私たちが、シティ・アカデミアに着いたら、それを正面玄関に持ってきて」

「女の子の肖像画って……アンナのか? いったい、何のためにそんな物が必要なんだ? 第一、イヴァンって誰なんだよ?!」

「えっと、私をチャイニーズ・マフィアから助けてくれた、ゼファー11100のライダーよ」

「はあ……?」

ますます、訳がわからなくなつて、キースは、再び沈黙する。すると、「じゃ、また後でね!」というミルドレッドの声を最後に、

通話は切れてしまった。

切れた携帯電話の信号音まで、音符マークを奏でてるみたいに妙に明るく聴こえてくる。

「あいつ、相当に怖い目をしただろうに、何であんなにハイなんだ？」

心配してる俺にとっては、たまったもんじゃないと、すぎるような視線を、隣にいるパトラッシュに送る。けれども、彼の相棒は、”そんなこと言われたって……” とばかりにくるりと窓の外を向いてしまった。

時刻は、すでにお昼の時間を2時間以上も過ぎていた。

そして、お腹が空いているのに初めて気づいた一人と、眠そうな一匹を乗せた黒塗りのリムジンは、帰途を急ぎながら、緑の街々を過ぎてゆくのだった。

\* \*

暮れなずむ空から西日が入り込んでくるシティ・アカデミアのアトリエ。

窓の下に敷かれたラグマットの上では、白と茶色の中型犬が寝息をたてている。超豪華な造りの建物の中で、唯一とっていいほど質素なこの部屋だけが、落ち着ける場所なはずだった、キース・L・ヴァンベルトは、いつになく、いらいらとした様子で壁掛け時計に目をやった。

午後5時

夕方に帰ってくるというミルドレッドからの帰還の電話はまだ無く、仕方なしに、イーゼルに立てかけた曰くつきの”ヴァージナル



の前に座る婦人”に目を向けた。

女教師、レイチエルがグレン男爵から預かったこの絵には、観覧者の少年が入り込んでしまっているらしいと、学園ではまことしやかに囁かれていた。実際、今、キースが見ている絵の中には、魅惑的な表情をしてこちらを向いている婦人の後ろから、彼女を愛おしげに見つめる少年の姿が描かれていた。そして、男爵の言葉を信じるならば、この絵は彼が中国の贗作村で作らせた贗物で、絵に入り込んでいる少年は彼の息子なのだという。

「……で、その少年を俺の力で、この絵の中から出してやってくれるって言ったって……」

そんなの無理だろ？

だいたい、本当にこの絵の少年が彼の息子だっていう話の信憑性だって疑わしいもんだ。あのチャイニーズ・マフィアの暴れっぶりから見ても、グレン男爵が相当な食わせ者だって事は明らかだし。

キースは、仕方なく、もう一度、“ヴァージナル”の絵の近くまで歩み寄って、その絵をまじまじと眺めてみた。すると、

”あら、その絵には本当に少年が入り込んでいるわよ”

そんな鈴が鳴るような可愛らしい声が背後から響いてきたではないか。どくと心臓が大きく波打つ。この声には確かに聞き覚えがある……いや、まさかな。けど……

ふうと一つ息を吐く。

この声だけは、やっぱり、忘れようにも忘れられない。これは、去年のクリスマスに古い洋館で出会った幽霊の……

それから、キースは覚悟を決めたように、くるりと後ろを振り返った。ところが……、

「……」

彼の背後には誰もいなかった。その代わりに、アトリエの隅に立ってかけられた、グレン男爵から託された”少女の肖像画”が、はにかんだ笑顔でキースの方を見つめていた。

気のせいだったのか……確かにあの娘の声がしたと思ったのに……。

彼の上着のポケットから、携帯電話の呼出し音が鳴り響いたのは、その時だった。

急いで、携帯を手取る。すると、

「キース？ 私よ、ミルドレッド。今、どこ？ アトリエ？ 私がイヴァンに乗せてもらったバイクって、今、ちょうど、シティ・アカデミアの近くの交差点まで来てるの。カワサキのゼファーよ。黒い大型バイクだから、すぐにわかると思うけど、あとちょっとで、正門前に着くから外に出てきて待っててよ」

相変わらずの命令口調のお嬢様の声に、キースは戸惑った顔をする。

「その時に必ず、あの“女の子の肖像画”と一緒に持ってきてね！イヴァンが見たがってるんだから」

“アンナ 11歳”

それは、幽霊のアンナが生前に、画家の父に描いてもらった肖像画の中の1枚。

40年も前に描かれたその肖像画を見たいなんて……ミリーをチャイニーズ・マフィアから助けてくれた、イヴァンって奴は、何者なんだ？

ややこしい事態が、余計に、ややこしくならなきゃいいが……とキースは、小麦色の髪を掻きむしる。けれども、仕方ないかと、少女の肖像画を小脇に抱えると、まだ、眠たそうに目をしょぼつかせているパトラッシュを引き連れて、足早にアトリエから出て行った。

## Chapter 10

日はすでに西に傾いていた。アナの肖像画を小脇に抱えたまま、強い西日が差し込む正面玄関のファサードから外に飛び出したキースは、西日の眩しさに思わず目を細めた。すると、その視界に一台の黒いバイクが入り込んできたのだ。

「あれがイヴァンって、野郎か？」

車体と同じ黒のフルフェイスのヘルメットのせいで、そのライダーの顔はよく分からなかったが、全身、黒づくめの格好と、けたたましい、4気筒のエンジン音が合いみえて、何ともいえない殺那的な雰囲気醸し出しているではないか。それにしても……

「あのデレデレしたお嬢様の態度って、どうなんだよ?！」

ゼファー1100の後部座席で操縦者にぴったりとくっついている、大型バイクの風体には全くそぐわない花模様のワンピースの小学生に眉をしかめる。それでも、キースは、

「おい、ミリー、こつちだ!」

と、つい大声で彼女の名前を呼んでしまった。黒塗りのバイクが砂煙をあげて、彼の前に止まったのは、その直後のことだった。

「キース! パトラッシュも来てくれたのっ」

ミルドレッドがバイクから降りた……その時、

キースは、小脇に抱えた肖像画が、何かに驚いたように腕の中で飛び跳ねた……ような気がしたのだ。そのとたん、肖像画はその手をすり抜け、

「ちょ、ちよっと、待てよ!」

そんな声をあげてしまった持ち主を無視して、そのまま、地面に落ちてしまった。その時、ヘルメットを少し上にあげ、肖像画に目をむけたゼファーのライダーの意味深な表情……って?

陰鬱な灰色をした寂しげな瞳。

けれども、下に落ちた瞬間に垣間見えた少女の肖像画を見て、彼はかすかに笑った。

“こいつ……何、笑ってやがる”

けっこうイケ面なところが、余計に気に入くわない。けれども、キースが、一言、声をあげようとした瞬間、彼はヘルメットを装着し直し、バイクをリターンさせてしまった。

「イヴァン、肖像画は見なくていいの?！」

そう言ったミルドレッドに背中ごしに手をあげる。すると、彼はそのまま、バイクを発進させ、その場から去って行ってしまった。

「何だよ。あいつ、自分から見たいって言うておいて」

いくらミリーの命の恩人だからといって、絶対、俺はあいつを好きにはなれそうにもない。ところが、ミルドレッドは、

「もう、用事は終わったんじゃないの」

無然とした顔のキースとは反対に、けろりと笑っているだけなのだった。

\* \* \*

午後10時。

窓の外に白い月の薄明かりが灯るシティ・アカデミアのアトリエで、キースはすっかり曰く付きになってしまった”ヴァーシナルの前に座る婦人”をしげしげと見つめていた。

その絵の中に入り込んでしまったという少年は、相変わらずの憧憬の眼差しでヴァーシナルに手を伸ばす婦人を眺めている。

だいたい、常識で考えてみたって、人間の子供が絵の中なんかに入り込むわけがないんだ。

”だよな？”と、足元で、丸い瞳を瞬かせている相棒のパトラッシュに同意を求めてみたものの、何かが心に引つかかって、キースは、もう一度、その絵をじっと見つめてみた。

けれども、万が一、本当に入り込んでしまったら、それが贗作だなんて、可哀想すぎないか？

その時、

「あら、本当にその絵には男の子が入り込んでるんだってば」

そんな風に背後から聞こえてきた声に、キースはぎょっと後ろを振り向いた。すると、枕を抱えた少女が、アトリエの戸口に立っているではないか。

「ミリー？」

ふらふらと、自分の近くに歩いてきた少女の顔を不審げに覗き込んだ後で、寝ぼけてやがると苦笑する。そういえば、今日は色んな事があって、こいつもかなり疲れてみたいからな。

けれども、ふと、おかしいぞ……と眉をしかめた。生徒の寄宿舎から彼のアトリエに辿り着くには、けっこう幾つもの廊下と階段を通る必要があるのだ。寝ぼけながら、来れる距離じゃない……。

すると、

「それに、夕方に会ったバイクの男とは、以前に会ったことがあるわ！」

眠ったままで、そんな風にまくし立てる、ミルドレッドのその声って？

違う……、これって、ミリーのじゃない……。

そう感じた瞬間、キースの心臓がどきりと高鳴りだした。やつぱり、この娘が帰ってくる前に聞いたと思ったあの声は気のせいなんかじゃなかったんだ。あの幽霊とは去年のクリスマスマスにお別れしたと思っていたのに……けれども、姿はミルドレッドでも、この声は間違いなくあの時の少女だ……月灯りに照らされたアトリエの中の画家は、壁に立てかけてあった、赤いドレスの少女の肖像画に目を向け、

「アンナ１１歳！……お前、ミルドレッドの中に入り込んで、一体、何をしようっていうんだよ！？」

## Chapter 11

若手画家に真正面から見つめられた少女は、はにかんだような笑顔を浮かべた。そして、

「だって、キースの顔を見たかったし、それに、私とこの娘の波長って、何だかすごく合っちゃって」

その言葉に、足元に中型犬をはべらせた青年は、かなり複雑な顔をした。

確かに、去年のクリスマスに、この娘が天に帰ってしまった時には、もう少し一緒にいたかったなんて思いもしたけど、あれはあれで、俺の中ではハッピーエンドって事になってたんだ……。

すると、ミルドレッドの中の幽霊の少女は、こんな事を言い出したのだ。

「その絵の中に入り込んでしまっている少年のことは、ちょっと後回しにして、あのバイクの男！ 私は彼を知ってるわよ。キースだって、見てたでしょ。あの男が私の肖像画を見て笑ったのを！」

「あの男を知ってる……って？ おかしいじゃないか。お前が死んだのって40年も前の話だろ。あのイヴァンって野郎は、どうみても20代にしか見えないが……それとも、アンナが幽霊になってからの知り合いってことか？」

けれども、

「ううん。私がああ男、イヴァン・クロウに初めて会ったのは、40年前の……私が病気で死んだ日のちょうど1ヶ月前のことよ」

「ちょ、ちよつと待ってくれよ。それって……」

キースは何だか、頭がこんがらがってきてしまった。イヴァン・クロウ……それが、奴のフルネームか？ けど、20代にしか見え



ない男に、40年前に死んだアンナが会っている？ そんな馬鹿なことって……。

思わず、足元にいるパトラッシュと目をかわしたが、彼の相棒も、この展開に、きょとんと目を瞬かせている。

アンナは、そんな疑問を更に深めるように、ミルドレッドの黒い瞳を彼らに向けて、

「あれは、40年前の11月終わりのことだった。体が弱かった私は、具合が悪かったのに、どうしてもクリスマスの聖歌隊の練習がしたくて、親に無理を言って教会に出かけていったの。結局、その数日後に、私は死んでしまったんだけど……イヴァン・クロウと私が会ったのが、その教会の中だったのよ。彼は教会の壁に飾られた宗教画を見上げていた」

「宗教画？」

「その教会で、イヴァンが私を見つけた時に、彼は私に何て言ったと思う？ やけに優しく微笑んで私のそばに歩み寄ってから……あいつは、こう言ったのよ」

キースは、少女の真剣な瞳に一瞬、沈黙する。すると、アンナはふうと一つ冷たい息を吐き、

「お前、もうすぐ、死ぬぞって」

「何い……?!」

「……その時の私のぞつとした気分、分かってくれる？ その時、私は絶対に、こいつに殺されるって思ったもん」

「殺されるって？ 実際には、お前は病気で死んだんだろ？ また、何でそんな風に考えたんだよ」

「だって、その当時のロンドンではね……」

そんな少女の意味深な声音が、しんと静まり返った夜のアトリエに響いて、一人と一匹の心臓の鼓動をときどきと早めさせる。

「殺人事件が横行してたのよ。それも、犯人はどれも若い男のよう

だって世間では、すごい噂になってた。おまけに、その時の教会で私のそばまで歩いてきたイヴァンは、私の首筋にそっと手を触れて……」

「首筋に手を触れて……？」

「死にたくないよな」って、微笑んだのよ」

それは、キースには相当に衝撃的な話だったが……

「けど、」死にたいか」って聞かれたよりは、ずっとマシかと、

「……で、その時、アンナは奴に何て答えを返したんだ？」  
すると、

「私は、」当たり前でしょ！」って答えたわ。それに、その時、私はクリスマスと同じ日の誕生日にできあがる、12番目の肖像画をととても楽しみにしてた。画家だったお父さんはいつも自慢げに、こう言ってたわ。」聖なる日に生れし子の聖なる記録。自分が絵筆を握られなくなるまで、俺はそれを描き続けるぞって」

” 聖なる日に生れし子の聖なる記録” か……。

その12番目の肖像画を見れずに死んだ、アンナのことを思うと、キースは少し哀しいような気分になってしまった。けれども、

「……で、お前は、あの男にも同じことを言ってたわけ？」

少女はこくと首を縦に振り、

「そしたら……イヴァン・クロウは、小さく笑うと私から手を引いて、そのまま教会から出ていったの。私が生きている間に彼と会ったのは、それが最初で最後。でも、あの時と格好は違っていても、あいつは、あのバイクに乗ってた男よ！ 私は絶対に見間違えたりしないわ」

手を引いた……て？ それって、その時のアンナの台詞のせいな

のか。

聞けば聞くほど訳がわからない話が多すぎて、キースは頭が痛くなってしまうた。

その時、アトリエの窓が、風に吹かれてがたと音をたてて開いた。それとともに、室内に入り込んできた夜風が、キースの首筋に薄ら寒い感触を残して通り過ぎていった。

## Chapter 12

ヤバイ。話が本当にオカルトめいてきた。

……が、

くわんっ

” 気を取り直せ ” とばかりに、彼を励ましてくれたのは、彼の相棒・パトラッシュの元気な鳴き声だった。キースは、はっと、足元で尾を振る中型犬に目を向ける。

いけねえ、こんなことくらいで、めげてちゃ駄目だ。どっちみち、この学園と契約した時から、俺は波乱含みの展開は覚悟の上だったんじゃないか。

ふうと深呼吸してから、アンナが入り込んでしまっている黒髪の少女に再び向かい合う。

「……で、言いたいことは、それだけか？」

「え……っと、まあ、そんなとこかな」

「なら、さっさと、ミリーから出ていけよ。いつまでもそいつの中に入っていると、その娘の気の強いのがうつちまうぞ」

アンナは好きだけど、ミルドレッド、本人の許可もなしに、彼女の体に入り込まれるっていうのは、やっぱり、あまりいい気分じゃない。

すると、彼の口調が少し冷たかったのか、アンナがくすんと哀しそうに瞳を潤ませたのだ。しまったと、キースは慌てて、

「あつ、あつ、ご免。せつかく来てくれたのに、俺、お茶の一つも出せなくて……」

そんな会話を続けているうちに、午前12時の鐘が鳴った。すると、少女の幽霊は、

「あ……いけない。あまり長居していると、私、本当にこの子の体をのつつてしまうわ」

と、はにかんだ笑みをうかべて、

「また、来るわね」

小さくウィンクすると、ミルドレッドの体から出ていった。

再び、夜風がキースの頬を柔らかになぜ、その直後に、アトリエの窓ががたと音をたてた。どうやら、アンナは去っていったらしい。けれども、彼女に“また、来てね”とは、言えない状況に青年画家は苦笑する。

一方、アンナが出ていった後のミルドレッドといえば、

「ちょ、ちよつと、ちよつと……何で、キースが私のベッドルームにいるのよっ！」

心臓が飛び出そうになるほど驚いて、不意に自分の部屋に現れた（と彼女は思っている）青年を見つめている。

「何、言っただよ。ここは寄宿舎のベッドルームじゃないよ。寝ぼけて、枕持参で俺のアトリエにやって来たのはミリーの方だろ」

自分のパジャマ姿と汚れたアトリエを交互に見渡して、良家のお嬢様は、そうとは思えないような間のぬけた顔で、ぽかんと口を開いた。

「ヤだ……、私ったら……」。

けれども、

「こんな夜中に、こんな小汚い画家の部屋にいたなんて、みんなに知れたら、もうお嫁になんてゆけない!!」

高飛車にそう言い放った。

「小汚くて悪かったな。じゃ、みんなに見られないうちに、さつさと自分の部屋へ戻れば」

「……駄目よ。こんな時間にパジャマで外出だなんて、先生たちに見られたら、退学になっちゃう！」

ああ、本当に面倒臭い奴。やっぱり、アンナにのり移られてた方が、絶対に性格はいいに決まってる。

「なら、お前はどうしたいっていうんだよ」

「ここで寝る！ ちょうど、そこに毛布があるじゃないの。それと、そのソファを貸して。枕はここにあるから」

「おい、こんな場所で寝たら、お嫁に行けないんじゃないのか？！」

「別にいいのよ、バレなきゃ」

その後にキースに言いたい台詞を、ミルドレッドは、ぐつとこらえて、心と裏腹な言葉を呟くのだった。

「……あ、でも、間違っても、私を襲おうなんて邪な考えをもたないでね……」

「誰が襲うか！ お前みたいな色気のない小学生が、そんな台詞を吐くのは10年以上も早いんだよ」

けれども、突然、猛烈な眠気におそわれて、ミルドレッドは、ころんとソファに横になると、激早に寝息をたてしてしまった。その姿を青年画家は、呆れた様子で見つめる。

「ソファと、たった1枚しかない毛布を取られたら、俺の寝る場所がなくなっちゃうじゃないか。……でも、このままミリーをここに置いて、アパートに帰るわけにもゆかないし……」

仕方なく、キースはパトラッシュを枕にして、自分の上着を布団代わりに、ラグマットの上に横になるのだが、3月のピータバロ市

の気温はまだ低い。おまけに何か寒気がする。幽霊のアンナと会った後は、必ず風邪をひくっていうのに。

「……お、パトラッシュ、お前って、けっこう暖かい」

その暖かさに、ほっとすると同時に、気持ちよさげに眠っているミルドレッドに目をやった。

すやすやと眠る少女の艶やかな黒の巻き毛が、ばら色の頬を明るく浮きあがらせている。

あーあ、可愛いのは寝てる時だけか……けど、こいつって、また、目を覚ましてから、色々と騒ぐんだろっなあ。

まあ、それは、どうにでもなるんだけど。

軽く息を吐くと、キースは、再び、イーゼルの上に立てかけてある“ヴァージナルの前に座る婦人”の絵に視線を向けた。そして、「こつちの方は、そんな悠長なことも言えなくなってきた。そろそろ、本気で色々と調べてみないとな」と、頭元にいるパトラッシュに、半ば諦め加減にそう呟いた。

## Chapter 13

翌朝、ピータバロ大聖堂に隣接した王宮美術館に、キースは一人で出かけていった。最近、同伴させてもらえないパトラッシュは、不満顔だったが、あいにく美術館に入れるのは、盲導犬や介護犬の類だけなのだ。

平日、朝一番の美術館は、まったくの貸切状態で、ほとんど人がいない。美術学校、シテイ・アカデミアと提携しているおかげで、専属画家の彼は王宮美術館には、フリーパスで入ることができた。

ルネサンス風の豪華な入り口を通り、美術館の目玉の展示品が置かれる大展示室へ向かう。そこを中心に、各テーマに別れた細かな展示室があり、その部屋を抜けると、様々な絵画や彫刻などの目録や解説書などが置かれた資料室にたどり着く。彼は、その資料室を目指しているのだった。

床と自分の靴底が奏でる靴音を耳にしながら、キースは、こんな事を考えていた。

幽霊のアンナが言った”ヴァージナルの前に座る婦人”の絵の中に、本当に生きている少年が入り込んでいるってという話を信じるとして……

グレン男爵は、その少年は自分の息子で、別れた母親とよく似た絵の中の女性を慕って絵の中に行ってしまったのだと、俺に話してくれた。

……ってことは、あの絵が描かれた背景や、あの絵が贋作なんだってという根拠を、その少年に突きつけてやれば、さすがに目が覚めて、彼も絵から出てくるんじゃないのか。

そんな策を頭の中で練りながら、大展示室の終わりのブースまでたどりついた時、ふと隣の展示室にいる一人の客に目を向け、キ―



スは、心臓が飛び跳ねそうなほど驚いた。

何故なら、

黒のジャケットに黒のブーツ。髪の色が深い亜麻色でなかったら、ちよつと、重たすぎるようなスタイルの男が、展示室の絵の前に佇んでいる。

それは、彼が、昨夜、幽霊のアンナと散々話題にしていた……

「イヴァン……?! あいつ、こんな所で、何してやがるんだ?」

その男を目の前にして、どきどきと彼の様子を見つめる。だが、キースのいる場所からは、何をしているのかよく分らない。

ああ、こんな事をしてても仕方ない!

追い詰められると、この青年はとんでもなく大胆な行動にでる時があるのだ。それも、相棒のパトラッシュが歯止めをかけない時には。

そんなわけで、キースは、イヴァンにつかつかと歩みよると、

「やあ、昨日はミルドレッドを送ってくれて有難う。でも、こんな所で会うなんて、奇遇だなあ。……で、今日は何の絵を見に来たの?」

だなんて、質問を彼にぶつけてしまったのだ。

振り向いた男の鋭い刃物みたいな瞳に、再び心臓がどきんとする。けれども、負けじと、笑ってみせた。……が、男は、ちらりと一瞥をくれただけで、また、絵の方へ向き直ってしまった。

普通にしていれば、女の子に騒がれそうな甘いマスクをしてるのに、この無愛想さはもったいないなと、キースは眉をしかめたが、彼が見ていた絵に目を移して愕然としてしまった。

”聖ミカエルの肖像画”

確か、アンナが教会で会った男も宗教画を見てたって言ってた。  
……って、ことは、こいつは、やっぱり、アンナが40年前に会ったって言う“イヴァン・クロウ”なのか？！

次々と湧き上がってくる疑問。それだから、

「随分、熱心に見てるんだね。宗教画が好きなの？ おたく、グレン男爵の館にいたってことは、美術収集家か何か？」

イヴァンは、何も答えてくれない。っていうか、完全にキースは無視されている。それでも、ここで負けてなるものかと、

「俺は、この聖堂美術館と連携してる美術学校の画家だから、この展示物には詳しいんだ。この聖ミカエルの肖像画は、作者も年代もよく分からない作品だけど、戦火を免れた教会に残されていた絵ってことで、けっこう大切に管理されているみたいだよ」  
すると、

「この絵って……競売にかけられる予定はないのだろうか」

以外な事にイヴァンの方からそんな話題を持ち出してきたのだ。

「競売？ あんた、この絵を買う気なの？ やっぱり、どこかの画商が美術収集家なのか」

腑に落ちない様子で、黒装束の男を見る。すると、キースの脳裏に、にわかにアンナの肖像画を見て笑った、この男の表情が浮かび上がってきた。

「一つ、聞きたい事があるんだけど……俺が昨日、持っていた肖像画の少女。……“アンナ”をあんたは知ってるんだろ？」

その質問に、イヴァンは再び、むっつりと黙り込んでしまった。基本的に自分が質問するのは構わないが、質問されるのは嫌いなようだ。

「黙ってないで、俺の質問に答えろよ」

「肖像画の少女？ 何のことを言ってるか、さっぱり分らないが」

畜生、とぼけやがって……俺はお前がああ肖像画を見て、笑った

のをはつきり見てたんだぞ。

一旦、とんでもなく大胆になってしまった勢いは、もう止められない。ならばと、キースは最も禁忌な質問を彼に投げかけてしまうのだ。

「あんたのフルネームを俺は知ってるぞ。イヴァン・クロウ……っていうんじゃないのか？」

その瞬間、彼からの不意の攻撃から身を守るために少し後ずさるけれども、イヴァンは意外なことに、キースの方に視線を向けると、ひどく穏やかな笑みを浮かべた。そして、突然、彼の肩に手を回して、ぐいと自分の方へ引き寄せたのだ。

「ち、ちよつと……待って！」

長身のイヴァンの胸元に入り込んでしまったキースは、まるで彼に抱きとめられてるみたいな格好になってしまった。これって、誰かに見られたら、俺とこいつが怪しい関係みたいに見えるんじゃないのか？ そりゃあ、今のロンドンじゃ、そんなカップルなんて珍しくもないけど。

もの凄く焦る。焦る……。だが、

「騒ぐな。後ろにあの中国人がいる」

「中国人って……も、もしかして、チャイニーズ・マフィア？」

小声で呟く声にくくと小さく頷くと、イヴァンは、

「有難いことに一人……だ。こっちを狙ってる」

その言葉に、狙われてるのは、こいつか？ それとも自分か？

その区別がつかずにキースは戸惑った。けれども、いくらなんでも、この美術館の中で、ピストルを撃ってくるようなことは……。

……が、

「奴らは場所なんか気にしないぞ。特に下っ端の奴はな」

「なら、どうしたらいいんだよ」

「二手に別れよう。左右にちょうど隠れるのにいい柱がある。あの銃口が、お前と俺とどちらを狙っているかは知らないが、なるべく

姿勢を低くして逃げないと、頭を撃ち抜かれるぞ」

背後に殺人者を従えた若手画家は、泣きたいような気分になってしまった。こんな所で死ぬのは嫌だ。

「1、2の3！」

その声と共に、二人は、半ば転がるような体制で左右に分かれた。不意をつかれたのか、銃声は数秒後に響いてきた。……が、キースの方に弾は飛んで来ず、後から聞こえる銃声もすべてイヴァンの行く方向から聞こえてきた。

やっぱり、彼らの狙いはあいつの方かと、脳裏にグレン男爵の敷地で血まみれで息絶えていた、チャイニーズ・マフィアの散々な姿が浮かんでくる。

これは明らかに報復だ。奴らを殺したのは、やっぱり、あの野郎だったんだな！

銃を手にしたチャイニーズ・マフィアが柱の向こうに逃げたイヴァンを追いかけてゆく。キースは、よせばいいものを、その後を追いつ、そして、見てしまったのだ。

追いつ手の目をくらませた隙に、その背後に廻ったイヴァンが、手にしたナイフの切っ先をチャイニーズ・マフィアの首筋に向けて、振り下ろそうとする瞬間を。

「イヴァン・クロウ！ 殺すんじゃない！！ お前のお気に入りの“聖ミカエルの絵”に血飛沫が飛ぶぞ！」

そう叫んだ瞬間、キースは時間が止ったような気がした。

イヴァンの赤みがかった瞳が、虚をつかれたように、キースの方に向けられている。そりゃそうだろう。キース自身だって、自分がそんな台詞を言ってしまったことが、信じられなかったのだから。

警備員が走ってくる。それと同時に、王宮美術館の警報が、けたましく鳴った。その隙について、チャイニーズ・マフィアは、イヴァンの脇の下をすり抜けて逃げていった。

そ知らぬ顔で、ナイフをブーツに装着した鞘にしまふ男を目の前にして、戸惑いながらも、キースは、

「ミリーにしても、俺にしてもお前に助けられたって事には、とりあえず、お礼を言っとく」

だが、きつい口調でそう言ったものの……

また、穏やかに笑みを浮かべる彼の微笑に、たじろぐと同時に、ちよつと心を惹かれてしまった。

彼の背後では、あの“聖ミカエル”が絵の中で天使の羽を広げている。

殺人鬼じゃないか？ ……何で、こいつって、この絵の前だと、こんなに優しいげに見えるんだ？

……と、その時、

「……！！」

突然、背後から銃声が鳴り響いた。

「おいっ！？」

その直後に前に倒れこんだイヴァンの姿に驚き、キースは慌てて彼に手を伸ばした。

どうやら、腕を撃たれたらしく、彼の肩の辺りから血が流れでている。先ほど、逃げていったマフィアが、警備員を振り切って出口に走ってゆく。うろたえながら、そちらに目を向けた時、

「あんたたち、一体どういふつもりなの？！ ここは、銃撃戦をする場所じゃないのよ！！」

冷徹の女教師。レイチエルが彼らの前に姿を現したのだ。

## Chapter 14

キースたちが、王宮美術館で銃撃戦をしていた？ その同時刻にミルドレッドは、ロンドンのナショナルギャラリーにいた。

キースのアトリエにある、曰くつきの“ヴァージナルの前に座る婦人”。その嘘偽りのないオリジナルを所蔵しているのが、この美術館だった。

けれども、今回はそれとは別件で、名門校、ピータバロ・シテイ・アカデミアからの代表という名目で、ミルドレッドは、この美術館を見学に来ていたのだが……、

「同じロンドンにある、国立美術館・テート・ブリテンが、イギリス絵画を主としているのに対し、このナショナルギャラリーは、特に、イタリア・ルネサンス、オランダ絵画などに関しては、非常に充実しているですよ。この美術館は、所蔵作品の多さではパリのルーブル美術館、NYのメトロポリタン美術館などには敵わないが、作品の質の高さでは他の大美術館にひけを取りません」

「すばらしいですわつ。教科書に載っている、ルーベンスの『パリスの審判』やモネの『睡蓮』や、ゴッホの『ひまわり』等のオリジナルをここに来れば、生で見れるんですもの。本当に素敵！」

「ほお！ さすがは、シテイ・アカデミアの生徒さんだ。お嬢さんは、よく勉強しておられる。まったく、将来が楽しみですな！」

美術館館長の説明を聞きながら、社交辞令をふんだんに取り入れた彼の言葉使いに、ミルドレッドは、うんざりと眉をしかめる。

いくら、シテイ・アカデミアの生徒の親に有名な画商や、美術収集家が多いっていったって、こいつら態度が極端すぎる。けどね、私たちが、この美術館を訪れた本当の目的を知ったら、この館長だって、そんな悠長なことは言ってられないわよ。

ミルドレッドは、意味深な笑みを浮かべると、彼女の傍で熱心にメモを取っている仲間の男子生徒にこそりと呟いた。

「首尾はどう？ 今日には次の郊外学習にここを訪問した時に、みんなで盗み出す絵の下見をしに来たんだから、経路はきちんと確認しておいてよね」

「それはもう、ばっちりだよ。盗みの段取りは、前回と同じで、生徒で絵を囲んでおいて、館内を停電させた隙に、ミリーが贋作とすり替えるってことで」

けれども、余裕の笑顔で頷くミルドレッドに、男子生徒はうつてかわって真剣な顔になり、

「でもさ、僕たちが、色んな美術館から絵を盗みだす時に、すり替える贋作って、うちのお抱え画家のキースが描いてるんだろ？ 大丈夫かな。いつか世間にバレやしないかって、僕はどきどきしてしまっただけだ」

「何よ、あんた、彼の腕前を疑ってんの？！ 今まで何件もの美術絵画のすり替えを私たちは、やってきたけど、今だに一件だって、バレたことなんてなかったじゃない」

ところが、男子生徒は、

「大きな声を出すなよ。違うんだ。僕が言いたいの、キースの描いた絵っていうのはさ、贋作でも……何ていうか、本物より、ずっと良かったりするから……。だから、心配なんだよ。いつか、僕らの嘘がバレてしまっんじゃないかって」

確かに、ミルドレッドにしても、それは感じたことがあった。あの若手画家には、並外れた才能がある。小学生とはいえ、大手の画商の家に生まれついた彼女は、絵に対しては驚異的な審美眼を持っていた。キースはいつまでも、贋作師をやっているだけの画家じゃない。それに、ミルドレッドやピータバロ・シティアカデミア自体だって、こんな馬鹿げた盗賊団を続けているわけにはゆかないこと



もよく分かっていた。けれども、

「今は、とにかく、レイチエルの命令に従うしかないの。でも、後々、彼女を失脚させるだけの証拠は、ちゃんと手元に集めながらね」

ミルドレッドは、男子生徒にそう告げると、ナショナルギャラリーの館長の元へそくさと歩み寄っていった。そして、満面の笑顔で彼にお願いした。

「館長さん、私、このナショナル・ギャラリーを訪問したら、絶対に見たいと思っていた絵がありますの。だから、案内してくれますか」

笑えば、小学生でもアイドル並に可愛いミルドレッドだ。とたんに、中年男の館長はでれっと相好を崩した。

「もちろんですとも、それで、お嬢さんは、どの絵を見たいのですか」

「フェルメールの“ヴァージナルの前に座る婦人”を。ここの美術館はそのオリジナルをお持ちなんですよ？」

グレン男爵の息子が入り込んでしまったという贋作。その“ヴァージナルの前に座る婦人”のオリジナルはロンドン・ナショナルギャラリーにある“

この美術館に来た目的も、盗みのための下見というより、その絵を真近で見たいと思ったからなのだ。

「え？ あれは、フェルメールの晩年の作品で、最高の出来というわけではありませんよ。同じフェルメールでも、見るなら他にもっといい絵が……」

けれども、ミルドレッドは、きっぱりと言いきった。

「いいえ、私が見たいのは“ヴァージナルの前に座る婦人”なんです。どんな名作よりも、私はその絵を見たい。できれば、絵をはずして、絵の裏側とか、油絵の具ののせ方なども拝見したいんですけど……私、今、ルネサンス時代の作画技法の勉強をしているも

のですから」

「や……それは、まあ、あの有名な画商のカーンワイラー家のお嬢さんの頼みなら、しかし、その年でルネサンス時代の作画技法とは……まいましたな」

たまげた様子で、目の前の小学生に視線を向けた館長。だが、ミルドレッドにとっては、

今、キースのアトリエにある贋作が、そのオリジナルとどれ程、似てるかを見極めてやる。それに、きつと、キースだって、その話を聞いたら、興味を持つに決まってるんだから。

ナシヨナル・ギャラリーの館長に関心されるよりも、そちらの方がずつと大切だったのだ。

\* \*

ピータバロ・シティ・アカデミアの医務室。

運が良かったのか、王宮美術館で撃たれたチャイニーズマフィアの弾は、イヴァンの腕をかすただけだった。早朝で来館者もいなかったのを良いことに、キースたちは、後始末を警備員たちにまかせて、学園の方に戻って来たのだが、レイチエルは、

「警察には知られないように、さっきのことは有耶無耶にしたおいたわ。色々とかぎまわられると、後々やっかいでしょ」

イヴァンの腕に包帯を巻きながら、キースは怪訝な顔をする。

「あんな騒ぎがあったのに、王宮美術館側がよく黙っていてくれるんだな」

「グレン男爵との間にホットラインを引いたの。彼は、王宮美術館にとっては、一番の寄贈者ですもの。あの男に電話一本かけてもらえば、美術館の関係者は誰も口を出せないわ」

「しばらく姿が見えないと思っていたら、レイチエル、あんたは、もう、あの男をまるめこんだのか!？」

「まるめ込んだなんて聞こえの悪い。交渉したと言つて欲しいわ」  
涼しげな顔でさらりとそんな台詞を言つてのける女教師に、キースは呆れたような瞳を向ける。

どうせ、色仕掛けと上手い口車で、話を早く進めたんだろ。胡散臭い男爵と、”超”胡散臭い女教師が、頭をつき合わせて悪巧みなんて、想像しただけで鳥肌が立つ。

すると、先ほどから彼らの話を聞いていたイヴァンが、おもむろに声をあげた。

「あんな悪どい画商と交渉して喜んでいるとは、ここもろくな学校じゃないな。チャイニーズ・マフィアに狙われても当然ってところか」  
そんな男を女教師は、眼鏡の奥から睨みつけ、

「実際にマフィアに撃たれてるのは、あなたでしょ。胡散臭いのはそっちの方！それに、男爵のことも色々と知ってるみたいだけど、あなた、一体、誰なのよ。それに、あそこで何をしていたの」

イヴァンは、ジャケットを羽織ながら、赤みかった灰色の瞳を女教師に向けて意味深な笑みを浮かべた。丹精な顔立ちの彼に真っ向から見つめられて、レイチェルは、百戦錬磨の女にしては、不覚にも頬を一瞬、赤らめてしまった。

どきりと彼女の胸の高鳴りが聞こえる。その様子を傍で見ていたキースは、思わず鼻白んでしまった。

知らないんだろ？ こいつは、油断してると咽喉ぶえを搔っ切つてくる“連続殺人犯”なんだぞ。

そんな彼の思いなんて、てんで無視して連続殺人犯は、こう言つた。

「絵を探していたんだ」

「お前つてやつぱり画商なのか？ だから、ミリーと俺がマフィア

に襲われた時に、グレン男爵の館にいたってわけ？」

そのキースの質問にレイチエルが、

「館にいた？ この男が？」

「ほら、話しただろ。ミルドレッドをマフィアから助けてくれた、バイクに乗った男がいたって。それが、こいつ……えっとイヴァン……」

「イヴァン・クロウで構わないぜ」

冗談まじりに彼は言うが、どこまで本気なのかが、よくわからない。けれども、この男が、チャイニーズ・マフィアを殺ったことは、レイチエルには、秘密にしておいた方が良いみたいだ。

すると、イヴァンは突然、椅子から立ち上がり、

「聞かれちゃ不味い話が、色々とあるんだろ。だから、俺はもう失礼するよ。出口までの道は分るから、着いて来なくても結構だ」

「でも、お前、撃たれた傷は？！ かすただけって言ってたけど、けっこう血が出てたじゃないか」

彼はその言葉にくすりと笑う。

「あんなもの出血のうちに入るものか……俺は、いつももっと大量に見てるぜ」

キースは思わず背筋がぞくりとする。そんな若手画家に一瞥を送ってから、イヴァンが医務室の扉に手をかけた時、

彼を手で制して、レイチエルがまくしたてるように言った。

「ちよっと待って！ 分っていると思うけど、ここでの事は他言は無用よ。イヴァン・クロウって言ったわね。あなたも表街道を堂々と歩ける人間じゃないみたいだけど、もし、外で余計なことを話したりしたら、あなたのことだって徹底的に調べてやるわよ」

イヴァンは、ちらりと彼女の顔に目をやった。それから、自分の腕を押さえた彼女の手首を軽く握った。小馬鹿にするように口角を上げる。その手をぎゅっとひねると、

「俺に指図をするな」

その直後に、レイチエルの手を払いのけて、イヴァンは医務室か

ら出て行った。思わず、後ろずさった女教師の姿に、キースは、彼に大拍手を送りたくなる。……が、

「レイチエル？ どうしたんだ？」

ふらりと壁側によろめいた彼女を見て、眉をしかめた。すると、  
「大丈夫……ちょっと眩暈がしただけ」

そういつて、椅子に腰掛けた女教師の顔色は少し蒼ざめていた。

時計を見ると、お昼の時間をとうに過ぎてしまっている。キースは、うつとうしい話は早く終わりにしてしまおうと、

「……で、グレン男爵との会談では、贗作村の権利をシテイ・アカデミアに譲るって話も、当然、出たんだろうな」

「出たわ。彼、あまりに四方八方に手を広げすぎて、贗作村の経営にまで手がまわらないようね。でも、顧客が大勢いるものだから、放り出すわけにもゆかず、だから、その話はまさに渡りに舟だったようで。グレン男爵は、詳しい事はすべて、あなたに託していると言ってたわ。詳細はあなたに聞けと。一体、彼はどういう条件を出してきたの」

レイチエルは、俺がグレン男爵の息子を絵から出してくれたら、贗作村を譲るっていう、あの条件の事を知らないのか……。

しばらく、キースは考えてみる。……やっぱり、こんな話はしない方が得策だ。

「特に条件はなかった。まあ、譲渡には、それ相当の金は必要だろうが、ただ……」

「ただ、何？」

「少し時間をくれと。贗作村を手放すにしても色々な手続きをしなければならぬから」

歯切れの悪い青年画家の言葉に女教師は、一瞬、訝しげな顔をする。

「で、でもさ、待てば、贗作村の利権が転がり込んでくるなら、それはいい話だよなっ」

無理矢理に笑顔を作ったキースに、それはそうねと、頬を蒸気させた女教師。その姿を見て、キースは皮肉っぽく笑った。すると、その笑みが気に食わなかったのか、

「なら、あなたはさっさと、アトリエに戻って、贗作作りに精を出しなさいよ！ 手抜きは許さないわよ。そのために高い契約金を払ってるんだから」

「分かってるよ。でも、一つ言っておきたいんだけど、あんたは、贗作村の経営権を手に入れるなんて簡単に言ってるけど、贗作村を手に入れるということは、あのチャイニーズ・マフィアを相手にするって事、分ってるんだろ？ グレン男爵だって、それが面倒になって、俺たちに重荷を押し付けようとしているに決ってる」

すると、レイチエル、ほほと鼻で笑って、こう言った。

「ちゃんと、そっち方面にもコネがあるのよ。この界限をちょこまかと動き回っている雑魚のマフィアなんて、いつでも圧力がかけれるわ。成金上がりのグレン男爵とピータバロ・シティ・アカデミアとは、そのところが違うの。きっと、贗作村だって、うちが経営した方が、上手くゆくんじゃないかしら」

キースは、勝ち誇ったような女教師の顔を見据えて、そんな物なのかと眉をしかめる。それにしては、あいつら、随分、殺気立ってたような気がするけど。

「分かったよ。なら、俺はアトリエにもどるから。今日は資料集めに、王宮美術館に行ってたっていうのに、とんでもない事になっちゃった」

「資料は見つかったんでしょ。なら、明日にでも取りに行って、せいぜい、完璧な贗作を描いてよ。このピータバロ・シティ・アカデミアのために……ね」

その声が、悪い魔女の声音みたいに、頭の中に気分の悪い余韻を残す。

薄ら笑いを浮かべるレイチェルに、乾いたような一瞥を投げかけると、学園のためじゃなくて、“お前のために”だろ？ と、小さく口元で呟き、キースは部屋を出て行った。

廊下に出た時、相も変わらず豪華なシティ・アカデミアの内装にキースは眉をしかめた。いくら金持ちの坊ちゃん、嬢ちゃんを集めてるからといって、小学生ごときを賤けるのに、大理石の柱や煌びやかなシャンデリアで飾り立てる必要があるんだろうか。

俺が、ここを手に入れたら、真っ先に廊下を普通の床張りに換えてやるんだ。なんて事を考えながら、アトリエに向かうと、廊下の向こうに黒い制服を着た神父の姿が見えてきた。

ちえっ、また、怪しげなエクソシストのご来校かよ。どうせ、レイチエルと詐欺まがいの商談なんだろ。あいつが、グレン男爵にいらぬことを言うから、俺がおかしなことに巻き込まれるんじゃないか。

変に関わるとうつつとうしいんで、軽く会釈してアトリエに入ろうとする。だが、そんなキースの前に、神父が立ちふさがってきたのだ。

「何だよ」

「お前のアトリエから何やら不穏な空気が流れ出しているんだ。放っておくと、よくない事が起こるぞ。だから、わしをこの中に入れる！」

その傲慢な口調にむっとする同時に、キースの頭の中に、昨晚、ミルドレッドの体を使って現れたアンナの幽霊の姿が浮かび上がった。この神父はインチキ臭い奴だが、確かに靈感はもっている。アトリエには、アンナの肖像画だっけ置いてある。まずいぞ、こいつはあの娘の天敵みたいなもんだから。

「駄目、駄目っ！　これから俺は仕事なのっ。誰も中に入れるわけにはゆかない」



だが、そんなキースを押しつけて、エクソシストの神父はアトリエの中に、づかづかと入り込んでしまったのだ。  
すると……、

「お前、誰だ……こんな所で何してるっ!!」

アトリエの窓の横に立てかけてあった、“ヴァージナルの前に座る婦人”の絵の前に、黒いジャケットを羽織った長身の男が立っていた。振り返った彼の赤みかった瞳を、窓の外から差し込んでくる陽射しが、冷ややかに煌かせている。

イヴァン・クロウ……？

こいつって、医務室を出て、とつくに帰っていったと思っていたのに。

すると、イヴァンの足元にいたパトラッシュが、キースの元に嬉しそうに駆け寄ってきた。本当は、真つ先に、こんな場所にいる彼を詰問したいところだが、とりあえずは、アンナの肖像画を隠せとばかりに、パトラッシュに目で合図を送る。

ひどく胡散臭い目をしながら、神父が、アトリエの中を見渡している。ちょうど、アンナの肖像画のまん前にパトラッシュがどかと陣取ってくれて、上手く絵を隠してくれたのはいいが、キースは心臓がどきどきのしっ放しだ。

神父は“ヴァージナルの前に座る婦人”の絵を見据えると、  
「これか、学園で噂の”少年が入り込んでしまっている”というフエルメールの絵は？……うーん、確かにこの絵からおかしなオーラが出ているぞ」

そして、

「……で、おたくは誰？」

と、じろりと絵の前に立つ男に目を移したのだ。そんな神父が、ぎ

よつと後ずさつたのは、彼の目とイヴァンの目が合った瞬間だった。  
「お、お前、何者だ？ どこから来た？」

絵の前の男は何も答えない。

キースは焦る。

「お、俺の知り合いっ。この絵が見たいって言うもんだから、俺がここに通したんだ……で、もういい？ もう満足した？」

それなのに、

「滑稽な話もあったものだな。この少年……どう見ても、この絵の中の女に魅せられてる」

何でこの男に、そんなことが分るんだ……と、キースは眉をひそめた。けれども、神父は、首をひねって、イヴァンの言葉を頭の中で反芻している。ヤバイ、ややこしい奴に、ただでさえ複雑な話をもっと、ややこしくされるのは免だ。

慌てまくる若手画家にちらりと目を向けると、イヴァンは、

「用はもう終わったんで、俺はもう帰るよ。王宮美術館の前にバイクを止めっ放しにしてきてしまった。交通監視官に取り締まられると色々と面倒だから」

パトラッシュの頭を一撫でしながら、出口の方へ歩き出す。ところが、そんな彼に、神父は手を伸ばし、

「待て。お前から妙なオーラを感じるぞ。ちょっと、私の教会に来ないか。もし、おかしなモノに取りつかれてるようなら、格安で除霊してやつてもいいが」

しかし、イヴァンは、不機嫌そうに彼の手を払いのけ、

「町のエクソシストふぜいが、俺に気安く触るな」

「そんな事を言っていて、悪霊にどんどん蝕まれていった人間をわしは、沢山知っているぞ！ 悪い事は言わない。診断だけでも受けてゆかないか？ 時間は取らせない。忙しいなら簡単に済ませるし」

イヴァンの腕に再び手を掛けた神父は、いい客を見つけたとばかりにその手を離そうとしない。そのしつこい口調は、傍で聞いていても、気分が悪くなりそうなものだった。

「おい、もういい加減に止めるよ。そいつだって、嫌がつてるじゃない……」

ところが、たまりかねたキースが、そう言い終わらないうちに、  
「触るなど言っただのが、聞こえなかったのか！」

突然、イヴァンが、神父の腕を払いのけて、ブーツに装着してあったナイフを引き抜き、彼の咽喉ぶえに突きつけたのだ。

氷の刃みたいに冷たく光るハンティングナイフが、神父の咽喉を狙っている。

「ひいっ……！！」

わおん！！

と、アトリエにいたパトラッシュが、床を勢いよく蹴り上げたのはその時だった。

イヴァンの振るったナイフの刃が、神父の首筋に食い込もうとしたその寸前に、彼に飛びつきその体を壁の方へ押し倒した中型犬に、キースはまくしたてるように言う。

「いいぞ、パトラッシュ！ そのまま、その男を抑えとけっ！！」

中型犬といっても、相棒の懐具合が以前より改善されたせいで、彼は少々肥満ぎみだ。その体重まかせに、イヴァンの上に馬乗りになったパトラッシュの上に、さらにキースが覆いかぶさる。

すると、ほうほうの体で、ナイフの刃から逃げ出した神父は、腰が抜けたように床を這ってアトリエの戸口の方へ逃げていった。そんなエクソシストに向かって、キースは、

「とつとつ、ここから出てゆけ！ けど、ここでの事は他言は無用だぞ！ そんな事をしたら、今度は間違いなく、お前は、この男に命を取られるぞ！」

……が、息を継いだのもつかの間、

「あの……止めてくれよ」

今度は、自分の咽喉もとにあてがわれた冷たいナイフの感触に、

全身から血の気が遠のいてゆくような気がした。

「なぜ、止めなきゃならないんだ。お前は俺の邪魔をした。今の俺には止める理由は何処にも見当たらないが」

「だ、だって、人の咽喉を切っちゃ、や、やっぱり駄目だろうっ」

「俺にとっては、それが日常だが」

あああ……やっぱり、”連続殺人犯の常識”は、一般人とは違うんだ。

キースは、床に倒れながらも、彼の背中側から今にもナイフを突き立ててきそうなイヴァンの台詞に、頭が大混乱する。たのみのパトラッシュといえば、あまりに接近しすぎている殺人犯 ナイフ 相棒の距離に、手がだせぬ状態になっている。

背中越しにイヴァンの殺気を滅茶苦茶に感じる。ヤバイ、ヤバイ、ヤバイっ！ 何とかしなくっちゃ、このままじゃ咽喉を切り裂かれる。

すると、キースの頭の中に、今朝、王宮美術館の中で、この男が見ていた一枚の肖像画が浮かび上がってきたのだ。

「ま、待ってくれ。あんたはあの”聖ミカエルの肖像画”が欲しいんだろ。それも、きちんとした正規のルートで。お、俺だったら、それを可能にできるかもしれない」

すると一瞬、連続殺人犯はナイフの柄を握る力を弱めた。

「……」

「だから、俺と契約しよう」

その時に言ってしまった台詞を、キースは、何で言ってしまったのか、自分でも理解ができなかった。けれども、言ってしまったものは、もうどうしようもないじゃないか。

「契約？」

「俺は将来、いや、もうすぐ、この学園と聖堂美術館の経営権を手に入れる男だ。そうになったら、あの”聖ミカエルの肖像画”だって、自由に取引する権利を得ることになる。でも、そのためには、この学園を取り仕切ってる、あのレイチエルって強欲で凄腕の女を出し抜かなきゃならないんだ。でも、お前も見た通り、この学園にはチャイニーズ・マフィアとか変なエクソシストとか、また、生徒たちの金持ちの親にだって、グレン男爵並のおかしな輩が沢山いる。俺は、学園の生徒と自分を守りながら、これから、そいつらと戦わなくちゃいけないんだよ」

「……で、それが俺と何の関係があるんだ？」

「それは、これから話すから、とりあえず、そのナイフを下に下ろしてくれないか」

意外に素直にナイフを下ろしたイヴァンを見据えて、“危ない事は駄目だよ！”とばかりに、彼らの間にパトラッシュがそそくさと割り込んでくる。

キースは、そのパトラッシュの体ごしに、イヴァンを見据え、

「見ての通り、俺は力にはちっとも自信がないんだ。お前、かなり修羅場を潜り抜けてる感じだし……チャイニーズ・マフィア相手にも、全然動じないし……で、簡単にいえば、俺との契約っていうのは、その……俺たちを守る……用心棒になってくれないか？」

「用心棒?! この俺が!」

その言葉を聞いたとたん、イヴァンは堰が切れたように笑い出した。

「……で、お前がこの学園を手に入れた暁には、その代価にあの“聖ミカエルの肖像画”俺にをくれるっていうのか」

キースはその言葉に頷き、

「ただし、条件がある」

「条件？」

「人を殺すな」

「あの凶悪なチャイニーズ・マフィアを相手に、殺さずに守れとは随分と難しいことを言うんだな」

「……なら、あの肖像画は絶対にお前には渡さない」

「強引に奪い取るって手もあるんだぜ」

「お前は、そんな事はやらない。だって、お前があの絵を見る眼の直向さ……他の事は別にしても、あんな眼をした奴が、汚い方法であの絵を奪ってゆくななんて俺には考えられない」

それに、あの”聖ミカエルの肖像画”を後ろにすると、この男は聖者にかしづく使徒みたいに清廉と微笑むんだ。本当に、殺人犯だなんて思えないくらいに優しげに。

「……まあ、勝手にそう思うのは自由だが、例えば、お前とその契約したとして、こちらの命が危なくなっただけの場合はどうなんだ？ そんな時でも、殺しはご法度ってことなのか」

「……うーんと、それは、その時で……その状況に応じて……えーと、どうしようかあ」

口元でぶつぶつと迷っているキースに目をやり、再び、イヴァンは可笑しくてたまらないといった表情をした。けれども、その後、ゆっくりと立ち上がり、手にしたナイフの切っ先をもう一度、彼に向ける。

ぴしりと、アトリエの窓に突然、亀裂が入り、割れたガラスの欠片がイヴァンの頬向けて飛んで来たのはその瞬間だった。

「……！？」

寸でのところで、それを避けた彼の鋭い視線が、アトリエの窓の下を睨めつける。……が、その場所に置いてあった、少女の肖像画を見据えると、

「まったく、おかしな者にばかり好かれる奴なんだな」

と、気が萎えたように、ナイフをブーツに装着した鞘に収めた。

「じゃあな、俺はもう帰るから」

と、アトリエの出口に向かうイヴァン。だが、キースは、

「待てよ！ 契約の話は？」

けれども、イヴァンは、無言のまま扉を開き、外に出て行ってしまった。その後をパトラッシュが”待つてよ”とばかりに追いかけていった。

\* \*

自分以外は誰もいなくなってしまったアトリエは、ひどく、がらんとしていて、先ほどの騒ぎが嘘のようだった。窓の下に置いてある肖像画の中の少女“アンナ”のはにかんだような微笑だけがやけに、眩しく見える。キースはその肖像画に向かって、心の底から感謝を込めて、

「ありがとう。さっき、ガラスを割って、俺を助けてくれたのは“アンナ” お前だったんだろ」

肖像画の少女は何も語らなかったが、あれは、どう考えてみても、幽霊のアンナがお得意の”ポルターガイスト”だ。

あのエクソシストの神父がいたら、涙を流して喜びそうなもんだが、とキースは苦い笑いを浮かべたが、同時にこうも思った。

イヴァン・クロウは、突然割れたガラスにも、少しも驚かずに平然としてやがった。あいつ、やっぱり普通と違う。

っていうか、“連続切り裂き殺人犯”ってこと自体が、もう普通じゃないのか……。

でも、怖い気持ちはたつぷりとあるが、なぜだか、イヴァンの事が嫌いになれなかった。

後悔とは少し違った、“諦めてるのに期待を捨てきれない”みたいな妙な感情が胸に湧き上がってくる。

やっぱり用心棒になってくれなんて依頼するんじゃないかたかもそれに、もし、そうだったとしても、あんな危険な奴を俺が上手く扱えるわけないんだろっし。

まったく、前途多難って言葉がぴったりな今の状況。けれども、取り合えず今日のところは、

「殺されなくて良かったあ……」



と、キースは、安堵の息を吐いたのだった。

\* \* \*

その翌日、

王宮美術館に、昨日の騒ぎで持ち帰れなかった資料を取りに行った道すがら、昔、根城にしていた露店近くのカフェで、キースは、昔なじみの男と話をしていた。

王宮美術館に続く大通りの両端に、点々と出された露店と露店の間にあるカフェ。といっても、狭くて古くて、今にも壁紙がはがれおちそうなこの店には、馴染み客以外は好んで入る客などいなかった。だから、ここは、豪華な学園の雰囲気になどしても馴染めない彼にとつての安全地帯みたいなものだったのだ。

足元でパンをほおばっているパトラッシュの頭をなぜながら、昔馴染みの男は、キースが空の席に積み上げた資料の束と、横に立掛けてある四角い包みに目をやって笑う。

「随分と大量の資料を借りてきたもんだな。それ、全部、フェルメールのか。おまけにその四角い包みはキャンバスか。さては、シテイ・アカデミアが、フェルメールの”曰く付きの絵”を持ってるって件に、お前も関わってるんだろ」

「まあね」

「おい、おい、”思わせ振り”はここではなしだぜ。巷では、あの絵には生身の少年が入り込んでるって噂で持ちきりだ。キース、お前が集めてる資料って、その事と何か関係があるのか」

キースは、一旦、口を噤んだ。けれども、いくら気のおけない仲間でも、今は真実をすべて話すわけにはゆかない。

「学内の噂がいつの間にか、こんなに広まっちゃって、俺も弱ってるんだよ。ここだけの話だけど、あれは、とんでもない贋作だ。絵の中に生身の少年が入り込んでるなんて嘘だ。どこかの売れない画家が話題作りのためにあんな少年を絵の中に描き込んで、勝手に噂

を振りまいたんだよ」

噂の絵が贋作だと聞いた仲間の男は、そんなことだと思っていたよと、つまらなそうに珈琲をすすった。

その時、店のすぐ横に続く街路樹の向こうから耳障りなしやがれ声が聞こえてきたのだ。

“父と子と聖霊の名において、父なる神へ信仰の告白をせよ！

心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、神である主を愛せよ！”

聞き覚えのある声に、うんざりと眉をしかめて、キースは窓の外に目をやった。案の定、懲りもせず、昨日、会ったばかりの神父が、寄付金の箱を手にして町を練り歩いている。背中には“悪魔被い、いつでも承ります”なんて、おかしな看板までつけて。

「あの野郎、また、エクソシストなんて胡散臭いことをやってやがる。昨日、イヴァンに散々な目に合わされたっていうのに」

昔馴染みの男は、

「あの神父もこの界限では有名人だけどなあ、あいつの説教って、同じフレーズしか聞いた事がないんだけど」

と、笑った後で、

「それより、キース、お前も知ってるだろうが、今の巷の話題は、フェルメールの絵や、胡散臭いエクソシストのことより連続切り裂き魔のことで持ちきりだ。咽喉を切り裂いてくる殺人鬼。このところ、ロンドンの街は大変な騒ぎだぜ。切り裂きジャックの再来かっつね」

そいつの事なら、よく知ってるよと、思わず口から出そうになり、キースは言葉をぐっと飲み込んだ。何てったって、自分は昨夜、そいつに咽喉を切り裂かれそうになったんだから。

……が、気を取り直して、

「その切り裂きジャックって、ゼファー1100に乗ってるんじゃないか？」

「ゼファー？ カワサキのバイクか？ キース、お前、もしかしてそいつを見たのか？」

仲間の男は、興味津々の目をして、にやりと笑った。

「そりゃ、すげえ。大型バイクに乗った切り裂き魔って、それってヤバイんじゃないのか。ロンドン中のイカレた若者がこぞって、真似したがるかもな」

## Chapter 17

シティ・アカデミアへの帰り道、キースは足元の相棒に言う。

「なあ、お前ってイヴァンにけっこう懐いていたけど、あいつが怖くなかったのか？」

けれども、パトラッシュは、ただ嬉しそうに尾を振って、彼に歩いてくるだけなのだ。

それにしても……と、キースは思った。

あの絵に入り込んでしまったという少年は、どう見ても贋作の絵の中の女に魅せられてるって、イヴァンも言ってた。そんな理由で彼がこちらの世界に帰ってこないのだとしたら、やっぱり、どうにかして、外に出してやらないと。

ため息をつきながら、手に持ったフェルメールの図版を眺める若手画家。その足元に歩く相棒の”何を考えているの？”的な瞳を見据えて彼は尋ねる。

「なあ、パトラッシュ、俺って画家としての才能があるんだろうか」  
くわんと鳴いて頷くパトラッシュ。

「でも、それって、贋作を描くためのもんじゃないよな」  
じつと見つめ合う一人と一匹。

「でも、今はそんなこと言ってる場合じゃないのか」  
分かっているけど、やはり釈然としない思いは心に残る。

そうこうしているうちに、彼らはピータバロ・シティ・アカデミアの正門に辿り着いた。そして、正門を入ったところで、教室を移動中のミルドレッドと出くわしたのだ。

「キース！ パトラッシュ！」

元気な声で彼らの名を呼ぶ黒い瞳の小学生に、キースは少しばかり

り心が軽くなった。小生意気な口ばかり聞かし、俺をこの学園に引き込んだのはこの娘なんだけど、こいつの顔を見ると、難しい事でも何とかしなきゃって気分になってくる。

「ねえ、聞いてよ！ 私、昨日ね、ナシヨナル・ギャラリーに行ってたのよ！」

「ナシヨナル・ギャラリー？」

「でね、そこで、私……」

けれども、その言葉は、うんざりとした、キースの声にかき消されてしまった。

「ああ、次の絵を盗むための下見に行ってきたんだろ。そういや、レイチェルに指示されてる、すり替え用の贋作ってまだ仕上げてねえや」

「そうじゃなくって、私はねっ」

ミルドレッドは、どうしても、自分が見てきた“ヴァージナルの前に座る婦人”のオリジナルの話を彼にしたかったのだ。だが、そんなことに露も気づかず、

「会えて、ちょうど良かった。ちょっと、聞きたいんだけど、お前のセレブな友人たちの中に宝石商の子どもっている？」

「宝石商？ そりゃ、いるにはいるけど、それがどうしたっていうのよ」

唐突な彼の質問に怪訝な表情をしたミルドレッド。すると、

「なら、その宝石商の子の親に頼んで、ラピス・ラズリをカスでいいから、できるだけ集めてきてくれないか。あ、それと、顔料とか布とか道具とか、色々他に必要な物があるんだ。だから、俺の指示通りに集めてくれる？ それも、なるべく早く。かかる費用は俺の銀行口座にある分を使って構わないから」

と、言いながら、キースは自分のポケットからカードを取り出し、それを無造作に投げ渡してきた。慌てて、それを受け取り、ミルドレッドは、

「あら、ちゃんと銀行口座を持ってたのね。シティ・アカデミアの

契約金つてけっこうな額でしょ。それなら、あんなポロい所じゃなくて、もつといいアパートに引っ越せばいいのに」

「性に合わねえんだよ。……カードの暗証番号は俺の誕生日だから、わかるよな？」

そりゃ、わかるわよと、こくんと頷く。何故なら、この若手画家がピータバロ・シティ・アカデミアと契約した日が、彼の17歳の誕生日だったのだから。けれども、ミルドレッドは、物凄く胡散臭げな顔で彼が抱えた四角い荷物を見やり、その中を覗き込みに来た。「やっぱり思った通りだ。これって、王宮美術館で展示されずに、倉庫にしまつてあつた古い絵でしょ。時代は多分17世紀あたりの。それに、宝石のラピス・ラズリを集めるってことは、やっぱり、あのフェルメールの絵をどうにかしようって、キースは思ってるのね」「へえ、やっぱり分かった？ さすがは、”歩く美術蘊蓄”のミリ―だな」

けれども、好奇心満々のミルドレッドに、キースは意味深な笑みを浮かべただけで、

「ちょっと迷い子を呼び出そうと思ってね」

と、軽く手を振ると、パトラッシュを伴って、アトリエの方へとそそくさと歩いて行ってしまうのだった。

\* \*

”ヴァージナルの前に座る婦人”

それは、1675年頃に描かれた現存するフェルメールの最後の作品と言われている油絵だ。

鍵盤にそつと手をかけた若い婦人のたおやかなポーズと、鑑賞者の方向に向けられた魅惑的な眼差し。画面の左下から差す柔らかな光は、青のドレスの襜ひだを印象的に画面に浮かび上がらせている。

この”フェルメール・ブルー”とも呼ばれる、高貴な輝きをもつ

青の正体は、宝石のラピスラズリを砕いて作られた顔料の”ウルトラマリンブルー”であり「星のきらめく天空の破片」とまで称されるラピスラズリを、当時は大変な高値だったにもかからわず、フェルメールは惜しみなく、一枚の絵画を描きあげるのに使っていたという。

シテイ・アカデミアのアトリエのイーゼルの前に立ち、キースは、その上に置かれた真作と見紛うほどに良く描かれた - 贋作 - をじつと見つめていた。ただ、そこに描かれた婦人の後ろには、追慕の瞳で彼女を見る少年の姿があっただけれど。

この”贋作”よりも優れた……いや、今、ロンドンのナショナルギャラリーが所蔵している、本物の”ヴァージナルの前に座る婦人”とまるで変わらない“贋作”をつくるには、一体、どうしたらいいんだろう？

キースの脳裏に、かつて、フェルメールの贋作を何点もこの世に真作として認めさせた、オランダの画家で天才贋作師、ハン・ファン・メーヘレンの名前が浮かび上がってくる。

「なあ、パトラッシュ」

キースは、彼の横にちょこんと座って一緒に絵を眺めている相棒の中型犬に、半ば、独り言のように言った。

「メーヘレンって画家は、自分のオリジナルの作品をフェルメールの手法で描きあげて、それを真作として、ナチス・ドイツの高官に売りさばいちまうくらいに凄腕の贋作師だったんだ。彼がどのくらい凄かったかかっていうと、国宝のフェルメールの絵を敵に売った罪で逮捕された時に、売った絵は贋作だったって告白したのに、全然、信じてもらえなくて、最終的には法廷で、贋作を描く工程を実際に見せて、やっと自分の証言を認めてもらったくらいなんだ」

ちよつと話が難しいよと小首を傾げる、パトラッシュ。すると、  
「……別に俺は、そんな贋作師に憧れてるわけでも何でもないし、  
あの絵の中の少年を外に出してやりたいだけなんだけど、描くと決  
めた限りは頂点を極めたいっていうのが、画家の心意気ってものだ  
よな」

それきり口を噤むと、キースは、先ほど、シティ・アカデミアの  
正門で、ミルドレッドに覗かれた四角い荷物を手に取り、その包み  
紙をばりばりと破り始めたのだ。

彼女が指摘したように、それは、17世紀頃に描かれた無名画家  
の油絵だった。

彼は、その油絵の表面の絵の具を、パレットナイフでごしごしと  
削り落とした。

フェルメールの作品の贋作を数多く、手がけた天才贋作師ハン・  
ファン・メーヘレンがとった手法。

それに、俺は自分なりの手を加えて、このアトリエで、完璧な“  
ヴァージナルの前に座る婦人”の贋作を描きあげてやるんだ。



## Chapter 18

キースは、王宮美術館から借りてきた、フェルメールとメーヘレンの資料を交互に見つめ、思案する。

メーヘレンは、フェルメールの贋作を手がける前に、絵の具、絵筆、溶剤にいたるまで、すべて当時と同じものを手作りした。それには、フェルメール・ブルーを作り出す、ラピスラズリは絶対に必要なアイテムだ。

その宝石を絵の具として生成する方法を頭の中に刻み込んでゆく。作業に没頭してしまうと、時が経つのも忘れてしまう。そして、自分でも何時だか分からなくなってしまう頃、

いきなり足元を誰かに蹴り上げられた。

「痛えな……、何すんだよ」

眉をしかめて振り返った先に、黒い瞳を煌かせた少女、ミルドレットが立っていた。彼女は、一瞬、頬を赤らめたが、すぐにつんとすまし顔になり、大・小の荷物をどさりとキースの足元に置いた。

「だって、何回、名前を呼んだって、気がついてくれないんだもん。せつかく、キースに頼まれた物を色々と持ってきてあげたっていうのに」

「あれ？ やけに早いじゃん」

「何、言ってるの？ もう夜よ。画材なんかは学園から調達してきたわ。ラピスラズリはとりあえず、友達の実家の宝石商が持つてる分を分けてもらってきたから……で、これは使わなかったんで返しとく」

と、彼から預かったカードを差し出した。

「使わなかったって？ それで大丈夫だったの」

琥珀色の瞳を向けてくる若手画家を見据えて、美少女の小学生は、駄目、駄目つとばかりに、のぼせそうになる頭を、ぶるんと振るっ

た。

「だ、だって、画材やその他の機材は、学園のだからお金はかかってないし、それに、ラピスラズリの原石なんて、今じゃ、仕入れ値は馬鹿みたいに安いよ。だから、そんなのは気にしなくていいの。キースは、いつ、元の貧乏暮らしにもどるかかわかんないんだから、その口座の中のお金はちゃんと残しときなさいよ」

と、袋に詰められた、パンやらお菓子やら、飲み物やらを指差した。「それと、これは、私からの差し入れ。しばらく、このアトリエに籠るんでしょ？ 飲み食いはいちやんとしないとねー」

キースは、ラピスラズリの原石の今の価値を聞いて、何だか気が抜けてしまった。メーヘレンの時代に金より高価だった“天空の欠片”が今では、そんなものなのかと。

けれども、気を取り直して、

「分かった。色々ありがとう」

と、彼女がアトリエから出てゆくのを待った。

それなのに、ミルドレッドは、まだ、そこに居たそうな様子で、キースが、絵を削り落とした後のキャンバスを眺めている。

「綺麗に元の絵を落としたわねー。いい感じに17世紀風のキャンバスができたじゃないの。キースは、この古いキャンパスの上に“ヴァージナル”の贋作を描く気なんですよ。これだったら、後で鑑定士にX線をかけて調べられても、元絵は絶対にわからないわね」「別に鑑定士に見せようなんて気はねえよ」

と、若手画家は面倒臭そうに言った後に、

「ミリー、もう、行つていいよ。しばらくは、このアトリエには来ないで。それと、レイチエルとか他の生徒にも、そう伝えといて」

あゝあ、仕事に入ると、キースはいつも、愛想がなくなるんだから。

いつもの事と分っていても、寂しい気分になってくる。それだから、

「分かったわ。けど、用があつたら携帯で知らせて。いつでも来てあげるから」

と、ミルドレッドは、少し拗ねた顔つきで、そう言うてから、

いいもん。何てたつて、私はナショナル・ギャラリーで、本物の“ヴァージナルの前に座る婦人”を隅から隅まで見てきたんですからね。キースの贋作が出来上がったら、どのくらいの出来なのか、たつぷりと鑑定させてもらうんだから。

そんな事を考えながら、アトリエから出てゆくのだった。

\* \*

ミルドレッドがいなくなった後に、彼女が集めてくれた”贋作りグッズ”を机に並べて、キースは、偽物作りの工程を頭の中に描いてみた。

フェルメールの作品の贋作師を目指そうっていうなら、まずは、これが最重要課題！ フェルメールブルーの色を出す、絵の具作りだ。

まず、宝石のラピスラズリの原石を細かく砕き水につける。一晩経って水分が飛んだら、それに、にかわ液を混ぜて、模写する絵の濃さと同じになるように、絵の具の濃度を調節する。

けれども、絵の具ができたつて、肝心の絵の方が上手く描けなきや意味がない。

俺が贋作を描こうとしている”ヴァージナルの前に座る婦人”

フェルメールの絶頂期の他の作品と、彼の”最後の作品”と言われている、この絵の最も大きな違いは、婦人が身につけた青のドレスの襷ひだの描き方だ。晩年の衰えからか、この”ヴァージナルの前に座る婦人”の襷の描写は、以前のふわりとした描き方と違って、まるで平坦なデザイン画のように簡略化されてしまっている。

その微妙に衰えた手法までを真似て、俺は、元絵を削ぎ落として作った17世紀のキャンバスに、”ヴァージナルの前に座る婦人”をそっくりそのまま、描き写さなければならぬんだ。

さらに、絵の具は何世紀にもかけて硬くなり、亀裂ができる。キャンバスを円筒に巻きつけ、亀裂を入れる方法もあるけど、それでは整然としすぎる。だから、俺は天才贋作師、メーヘレンが試した方法に習って、絵の具の硬化には科学材料のベークライトを使い、除湿機と加湿器とドライヤーを使って、出来上がった贋作に真作と同じような亀裂を作ることにした。

ここまでやりゃあ、後は自分の腕次第だと考えて、キースはふと、王宮美術館から借りてきた資料の中に混ざりこんでいた、F・ウィーンというジャーナリストが書いた文章を思い出した。

”贋作者に必要な才能は、詐欺師としての才能、美術史家、修復家、化学者、筆跡鑑定家、文書係、嘘をつく才能”

そして、

「まったく、上手く言うもんだ。確かに、贋作師ってそういうもんかもしれないな」

と、意味深な笑みを浮かべるのだった。



## Chapter 19

一週間後の昼下がり。

女教師レイチエルを先頭にした、”盗賊団”ピータバロ・シティ・アカデミアの一行が、ロンドン・ナショナル・ギャラリーにやってきた。そう、今日は彼らが綿密に計画を立てて準備をしてきた“郊外学習”の日なのだ。

ぞろぞろと列を作って歩いてゆく生徒たちの前を歩くのは、さりげなく四角い紙包みを小脇に抱えた少女 - ミルドレッドだ。

「生徒の皆さんは、事前に配った見学順路に従って、絵を鑑賞して下さい。私は、館長さんに挨拶に行ってくるので、絵の説明は、事前に下見をしてくれたミルドレッドたちに任せてあります。くれぐれも、彼らの言うことをきちんと聞くように」

かるく目配せをしてきた、ブルネットの女教師に、黒髪の少女はこくと首を一つ、縦に振る。

「みんな、こつちよ」

絵を鑑賞するフリをしながら、ミルドレッドは生徒たちを今日のターゲットの絵 - 贋作とすり替える予定 - の場所へと導いていた。

平日で、館内には、それほど観覧者はいなかったが、それでも、行動を起こすのは人の波が途切れた時の方がいい。おまけに警備員の目がこちらを向いていないことも重要なポイントだ。ミルドレッドは、仲間の生徒たちに目をやると、少し緊張した面持ちで彼らを呼び集め、

「これから、この絵の説明をします。だから、みんな、私の周りを取り囲んで」

ぐるりと集まってきた、仲間の影に隠してもらいながら、四角い

包みから贋作の絵を取り出した。

今、製作中のフェルメールの贋作ほどじゃないけど、キースが、毎日、精魂かけて描きあげてる絵の中の一枚だもの。絶対に上手く、すり替えなきゃ。

ミルドレッドは、心臓の鼓動を整えながら、館内の様子を慎重に見極めた。そして、頃良いタイミングを見つけると、ポケットに入れた携帯電話の送信ボタンを押して、

“OK”

のメールを女教師レイチエルに送信した。

ナショナル・ギャラリーの館内の灯りが消え、けたたましく警報音が鳴ったのは、その直後だった。あらかじめ館内電源の位置を調べておいたレイチエルが、ミルドレッドのメールを合図に、それをOFFにしたのだ。

ざわつく人々の声。

慌てて駆けてくる警備員の靴音。

だが、館内の電気を目くらましのよう消せる時間は、ほんの数分なのだ。あまり長引かすと、事態は単なる停電ではすまなくなる。本物の絵をはずし、その場所に偽物を取り付けたミルドレッドたちの作業は迅速だった。けれども、再び、館内に灯りがついて、全体の景色が見渡せるようになった時、

ミルドレッドの心臓は、ときどきのしっ放しで、何食わぬ顔をしているのに、随分と苦労してしまったのだ。

どうも、いつもの調子がなくて、思わず、手元に確保した“本物の絵”から、すり替えた壁の絵の方に視線を移す。

“キースが描いた贋作……でも、やっぱり、これって本物より、ずっと、私には良くみえる”

その絵をここに残してゆくのが、もったいないような……そんな気持ちに囚われて、ぐずぐずと動かない彼女を見かねてか、

「ミリー、何やってんだよ!? 長居は無用だ。学校に帰るぞ!」

仲間の男子生徒に促され、ミルドレッドは、慌てて彼らの後を追おうとした。……が、

「ちょっと待って! その包みは何だ」

警備員の一人に、そう呼び止められてしまったのだ。とつさに包みを後ろに隠そうとした少女を警備員は、胡散臭げな目で睨めつけてきた。

「お前、どうも、さっきから挙動が不審だな。ちょっと、警備室まで来てもらおうか」

顔面蒼白でうろたえるミルドレッドを、遠巻きに心配げな他の生徒たちが見つめている。

どうしよう……。このままじゃ、絵をすり替えたことが、発覚してしまう。

学校ぐるみなのが、バレしてしまったら、お父様の名前にだって傷がつく。

ミルドレッドは、必死の思いで仲間を”逃げて!”と目で訴えかけた。

その言葉が通じたのか、心残りの様子で彼らは館内から出て行った。その後に、

「こっちへ来い!」と、警備員の男は無言を言わさぬ力で彼女の腕を引っ張った。

逃げ出すこともできず、今にも泣き出しそうな少女が、白い包み



を抱えたままで、警備室に連行されてゆく。

万事休すだわ……。キース、ごめん。私、あんたの作品……無駄にしちゃった。

少女の瞳に涙がじわりと浮かび上がった。……がその時、警備員の男が、ゆっくりと前のめりに倒れていったのだ。ミルドレッドは、突然、意識を失った男と、その後ろから現れた男の姿に目を丸くした。

亜麻色の髪。黒いレザージャケットと同色のブーツ。赤みがかつた灰色の瞳。

「イヴァン……？」

少女に向け、彼は笑った。

「そいつのことは気にするな。殺しちゃいない。それより早く、こっちへ来い」

\* \*

ナショナル・ギャラリーから少し離れた教会の中で、イヴァンは、ミルドレッドが盗ってきた戦利品を眺めながら、白々と言った。

「子供が窃盗団をやっているとは、本当にろくな学校じゃないんだな」ミルドレッドは、緊張の糸が切れてしまったせいかな、彼女らしくもなく、まだ、しくしくと泣き続けている。

「だって、今は仕方がないの。キースがああ学校を乗っ取ってくれるまでは、どんなことでも我慢なの」

「なるほど、そういう訳か」

イヴァンは、特に驚いた風もなく、薄く笑う。

教会の窓から差し込む日が作る、色取り取りのステンドグラスの

影が、少し斜めに傾き出した。そろそろ、時間も夕刻に近づこうとしているのだろうか。

先に帰った他の生徒たちは、どうしているかしら……きっと、物凄く心配してるに決まってる。

どうしようもなく不安になってまった少女の気持ち。すると、それを慰めるように、聖歌隊の歌声が、教会の奥の方から響いてきた。イヴァンはその麗らかな声に耳を澄ますと、

「もう、泣くな。聖歌隊の声が台無しになる」

「だって、だって、本当に怖かったのよ！」

まだ、涙にくれている少女に、イヴァンは、ちつと舌を鳴らしたが、次の瞬間には、うって変わって優しく微笑み、彼女の顔を覗き込んできた。その心を蕩かすような柔らかな視線に、ミルドレッドは、思わず頬を紅潮させた。すると、

「今日、捕まっただけのことは、全部、忘れてしまえ。グレン男爵の館の庭で俺が切り裂いたチャイニーズ・マフィアの時と同じように」

その言葉に、ミルドレッドは、きょとんと目を瞬かせた。その瞬間、

え？ ええっ？

目を泣き腫らした少女は、啞然と上を仰ぎ見た。

教会の天井から、粉雪が舞い散るように、大量の白い羽がふわりふわりと舞い降りてきたのだ。たった今、生まれたばかりの天空の光のように、一片の穢れもない純白の輝きが、優美な軌道を描きながら落ちてくる。

天使の羽……？

信じられない気持ちで、それを見つめるうちに、ミルドレッドは頭の中が真っ白になってゆくような気がした。そして、

「あれ……？ イヴァン？ それに私、何でこんな場所にいるの」「黒いレザージャケットを羽織った男は、少女の問いにそ知らぬ顔をして言う。

「ナショナル・ギャラリーからのお土産を俺に見せにきてくれたんだよ。もう、十分に堪能したから、お前はそろそろ学校に帰りな。また、バイクの後ろに乗せて俺が送っていつてやるから」

イヴァンに手を取られて、腑に落ちない顔で、ミルドレッド立ち上がったものの、

おかしいな…… “今日のターゲット”……この絵をナショナル・ギャラリーから盗んだまでは覚えているんだけど……。

けれども、教会の中から流れてくる聖歌隊の声がとても綺麗で、彼女は、夢現の気分になってしまっていたのだ。ミルドレッドは、夢想した。

そうだ、学校に帰ったら、アトリエに籠っているキースに一番にこの絵を見せてやろう。そして、こう言ってやろう。

“本物よりも、キースが描いた贋作の方がずっと、いい絵ねって”

彼が笑う顔。それを思うと、少女は楽しくてたまらなくなってしまう。そして、その気分が醒めぬまま、イヴァンが教会の裏から出てきたゼファー1100の後部座席に乗るのだった。

「ミリーが無事に帰って来た!!」

誰かが叫んだその声とともに、学園中ではてんやわんやの大騒ぎになってしまった。

彼女がナシヨナル・ギャラリーで絵のすり替えに失敗し、警備員に連行されていったまでは、仲間たちが目撃していた。けれども、その後にレイチエルがナシヨナル・ギャラリー側に探りを入れてみても、”今日は何もなく、平穩無事な日でした”と言われる始末だったからだ。

ミルドレッドの帰りをシティ・アカデミアの正門で、まんじりとした思いで待っていたキースは、彼女の無事な姿を見て、心底、安堵の息をついた。そんな青年画家を見つけて、ミルドレッドが黒い瞳を輝かせながら、駆けてきた。

「キース、これ見て！ 今日の戦利品！ けどね、この絵より……」  
ところが、盗ってきた絵を掲げた瞬間、

「良かった!……ミリー、心配でたまらなかったんだ!」  
彼にぎゅっと抱きしめられて、えっと小さく声をあげてしまった。廻りを見渡してみると、生徒たちがいつもの数倍も大げさな笑顔を浮かべて、ミルドレッドを取り巻いている。

「そ、そ、それより、この絵よりキースの贋作の方が……」

「そんなもの、どうだっていいんだ。ミリーが無事で本当に良かった」

そんな彼らを訝しげな眼差しで、女教師・レイチエル・が遠巻きに眺めている。

「やっぱり、こんな事を何時までもしてちゃ駄目だ。俺は一刻も早く、この学園を手に入れる。あんな欲深な女に好きなことをさせて

おくのは、もうご免だよ」

キースに、ここまで心配されたことが嬉しくて、ミルドレッドは、贗作のことを誉めるタイミングをはずしてしまった。それに、いつまでも彼の腕の中にとくとく、止まりそうなくらい高鳴っている心臓の音を聞かれてしまいそうで、気恥ずかしかった。それだから、かなり高飛車な声を出して、

「ちよつと、ちよつと、いい加減に離してくんない？　洋服に絵の具がついちゃったわよ」

そんな少女に目を向け、

「おつと、贗作作りの真つ最中だったんだ。もう行かなくちゃ。じゃ、ミリー、後でちよつと、手伝って欲しいことがあるんだけど、また携帯に電話するから。詳しいことはその時に」

キースは、そう言い残すと、名残惜しそうな少女を残して、そそくさとアトリエに帰ってしまうのだった。

\*　　\*

午前2時。

幽霊がもつとも好みそうな丑三つ時。

月の光が窓から差し込む、夜のアトリエで、キースとミルドレッドとパトラッシュは、彼が仕上げたばかりの“ヴァージナルの前に座る婦人”の贗作をしげしげと眺めていた。

「こんな時間に小学生を呼び出すなんて、それでいいと思ってんの？！」

と、言いながらも、ミルドレッドは、隣に立っている若手画家が仕上げた“贗作”の出来に、黒い瞳を輝かせた。

凄い……このキャンバス……ついさっきに仕上がったばかりの絵とは思えないみたいに、17世紀風の重厚さが表わされてて、おま

けに、この絵の中の婦人のスカートの襷に使われたウルトラマリンブルーの輝きは、どう見ても、フェルメールが描きあげたものとは思えない。

「さすがね。絵を描く事に関しては、私はキースに何も言うことはないわ。と言うより、フェルメールの真作とこの贋作を並べて、どちらが本物かって尋ねられても、私は、迷わずキースが描いた方を指差すと思うわ。それくらいにこの絵は完璧にフェルメールの手法をなぞってる」

審美眼にかけては、未恐ろしいほどの才能を持っているミルドレッドに、絶大に評価されて、キースはこそばゆいような笑みを浮かべたが、

「えつと……そこまで、誉めてもらえて光栄だけど、今日、ミリーにこんな時間にアトリエに来てもらったのは、俺が描いた贋作を鑑定してもらったためじゃないんだ」

「それ、どういう事？」

すると、突然、若手画家は真顔になり、膝を折って少女の目線に自分の目線を合わせてきた。

「な、何っ?!」

至近距離で見つめられると、いつにも増して、琥珀色の瞳が綺麗に思えて、ミルドレッドの心臓は飛び跳ねそうに高鳴ってしまった。ち、ちよつと待ってよ。よく考えてみたら、月光が差し込む夜のアトリエで、私、キースと二人きり!?

パトラッシュの存在など、てんで忘れてしまっている少女に、琥珀色の瞳をさらに真摯に向けて、キースは言う。

「これから俺がやることに、ミリーは許可をくれるかな? ミリーの迷惑になるようには、絶対にさせないし、後のことは、俺がきちんと責任を持つから……だから」

「だ、だから……何？」

「目を閉じといってくれないか」

この台詞に、ミルドレッドは本当に心臓が止まってしまおうかと思うくらいに驚いてしまった。まさか、まさか、まさか、私、お父様とでさえ、キスは頬に軽くする程度だったのに。

青年画家の顔が近づいてくる。

「許可してくれる？ 俺を信じて」

「……い、いいわよ……」

どきどきと高鳴り放しの鼓動を抑えながら、ミルドレッドは目を閉じた。すると、

「ありがとう、ミルドレッド」

キースは、感謝を込めてそう言うと、

「アンナ、頼む。ミリーが許可をくれたから」

アトリエの窓の下に置いてあった、少女の肖像画に向かって軽く手を振った。そのとたん、窓ががたと音をたて、夜の風を伴いながら、アトリエの中に入り込んできた。ミルドレッドの目が開く。黒い瞳を月明かりに輝かせながら。そして、

「また、来ちゃった。天才画家、そして贋作師のキース・L・ヴァンベルト！ あなたのお役に立ってるなんて、私はすごく幸せよ」

はずむような声でそう言うと、ミルドレッドの中で、“アンナ11歳”がはみかむように微笑んだ。

## Chapter 21

キースは、少女の笑顔を見て、ふうと一つ息を吐く。

本当は、また、幽霊のアンナを呼び寄せて、ミルドレッドの中に入り込ませるなんて、したくなかったけど……。俺の力だけじゃ、どうしようもないもんな。

「頼むよ。アンナ、この」ヴァージナルの前に座る婦人」の絵の中にいる少年の視線をほんの少しでいいから、外の世界に向けさせてくれ。俺たちの声は届かなくても、霊体のお前の声になら、きつと絵の中の少年は答えてくれると思うんだ」

確信があるわけではなかったが、以外と自分の勘はあたるんだ。と、キースは相棒のパトラッシュに目で語りかける。すると、彼の足元にいた中型犬は、尾をいっばいに振って、同意の意思を示してくれた。

アトリエに差す月明かりの下に、艶やかなミルドレッドの黒髪をなびかせながら、幽霊のアンナが、”ヴァージナルの前に座る婦人”の前に歩み寄ってゆく。

「キース、この少年の名前は？」

「えっと、確か、ウイリアム・M・グレンだったと」

分かったわと、アンナは、

「ウイリー、私の声が聞こえる？ 聞こえないなんて言わせないわよ。だって、ほら、今、あんたの耳がぴくりって動いたもの」

絵の中の少年に向かってそう言った。そのとたん、キースは、アトリエの中の空気が密になったような気がした。すると、

”誰だか知らないけど、邪魔しないでくれる。せつかくの綺麗な



ヴァージナルの演奏が聞こえなくなるじゃないか”

そんな少年の声が、どこからともなく響いてきたのだ。

キースは、その声にちよつと、焦ってしまった。多分……、これは、絵の中から聞こえてきてるんだよね……。もちろん、こうなることを想定して、ちゃんと段取りは考えておいたけど、自分のもと、幽霊とか怪異現象なんていうのは、大の苦手だったんだ。

「パトラッシュ、お願いだから、俺の傍にいてくれよな」

わおんと、可愛い声をあげた相棒の頭を一撫でして心を落ち着かせる。そして、キースは、いつもより生々しい感じがするその絵に向かつて、

「なあ、ウィリー、お父さんが心配してるんだ。だから、いい加減にその絵の中からこちらの世界へ戻ってこいよ。そのフェルメールは”贋作”だ。お前は、それを真作だと思って入り込んでいるが、”ヴァージナルの前に座る婦人”の本物は、今はロンドンのナショナルギャラリーに展示してある。お前の父親 - グレン男爵 - は、本物と見紛う贋作を中国の贋作村で作らせて、色々と悪徳な商売もしてたけど、彼は、俺に約束してくれたんだ。息子がその絵から出てきて自分の元にもどってくれたら、今、持っている財産も贋作村の覇権も全部、捨てても構わないって」

キースは、返事が返ってくるのをしばし待つ。すると、

”父が、あちこちで汚い商売をしたのを僕が知らないとも思っていたの？ それに嫌気が差して、母だって、家を出て行ってしまったんだから。でもね、父からいくら貰ったかは知らないけど、僕は騙されないよ。この”ヴァージナルの前に座る婦人”が贋作のはずがない。それでも、僕は小さい頃から色々な名画を見てきて、

絵の目利きができるんだ。僕は、僕から母を奪った父とそっちの世界が大嫌いになった。この絵の中の婦人のヴァーギナルの音色は、まるで、以前の母みたいに心に優しく響いてくるんだ。その音色を聞きながら、僕は一生、この絵の中にいる。だから、こんな風に呼び出して、邪魔をするのは、もうやめてくれ！！”

その頑なな口調に、やつかいだなと眉をしかめる。ここまで、自分の息子に不信感を持たせたグレン男爵って、何て罪な親なんだろう。

キースは言った。

「それでも、息子が戻ってきたら、今までの悪どい事業は全部、辞めるって言ってた時の、グレン男爵の目は嘘を言ってるとは思えなかったけどな」

”僕は信じない。そんなこと”

仕方ないなあと、ため息をついたキースは、

「ピータバロ・シテイ・アカデミア……目利きができるくらいに絵画に詳しいんなら、この学園の名前は知ってるだろうけど……実は、この学園の裏家業は学校ぐるみの名画泥棒でもあるんだよ。俺はその学園のお抱え画家ってわけ。それで、俺が”汚い商売をする”グレン男爵と知り合いの訳が分かるだろ。……で、もう一つ、俺たちの秘密を教えてやると、実は先日、俺たちは、ロンドンのナシヨナル・ギャラリーから本物の”ヴァーギナルの前に座る婦人”を盗んできたんだ」

と、少年が入り込んだままの”絵”が乗せられたイーゼルとちょうど、対面するように置いてあった、白い布がかけられたイーゼルを指差した。

”えっ……？”

「贋作なんかじゃない、本物のフェルメール。お前が入り込んでいる絵などより、数段、値打ちがある」ヴァーシナルの前に座る婦人のオリジナル」

一瞬の沈黙。

「見たくないか？」

”……そういえば、あの男もそんな事を言ってた。ナシヨナル・ギャラリーのフェルメールは、この絵よりずっといいぞって”

「あの男？」

”何日が前にこの部屋に来た黒いジャケットを着た男だよ”

「イヴァンか？！ あの男とお前は話をしたのか？」

キースはあまりの事に一瞬、声を詰まらせてしまう。幽霊のアンナじゃあるまいし、何故、あいつにそんな事ができるんだ？！ けれども、絵の中の少年は、そんな事を気にするでもなく、こう言った。

”絶対に騙されないけど、見るだけなら”

イヴァンの事に関しては、もっと、色々と探ってみたかったが、せつかくその気になった少年の気分を余計な質問をして、変えられたくない。それだから、キースは素早く布のかかったイーゼルの前に移動すると、なるべく大げさな仕草で、その布をはずしてみせた。

”これが、”ヴァーシナルの前に座る婦人”のオリジナル……”

その絵の中の婦人は、天空の欠片、ラピス・ラズリから抽出された、フェルメール・ブルーの輝きをまといながら、優雅な仕草でヴァージナルを奏でている。その婦人から醸しだされている純粋な愛けれども、その純粋な心を誘惑するように、その背後には娼家の画中画が掲げられている。その二つのテーマの対比は人生の表と裏をみごとに一枚の絵に描き現しているのだ。

”すごい。この絵には、フェルメールの画家としての魂が込められている”

甚く、感激している少年の様子を感じ取って、キースは言った。  
「どう？ お前が入り込んでいる絵がニセモノだってことがよく分つただろ？ 俺は、邪魔しないよ。入り込むなら、やっぱり、その贋作より、こっちのオリジナルの”ヴァージナルの前に座る婦人”の方じゃないのか？」

そして、くると対面している二枚の絵に背を向けると、まだ、ミルドレッドの中にいすわり続けているアンナに向かって言った。

「ああ、暇になった。ウィリーの宿換えが終わるのを待つ間に、アンナに”13枚目の肖像画”を描いてやろうか？」

「お断り。クリスマスにはまだ、ぜんぜん早いもん」

「お前、やけに冷たくなつたなあ」

「だって、私、幽霊だもん」

そんな戯言を言いながらも、キースは背中に全身全霊の集中力を集めて、後ろの動きを伺っていた。はやる気持ちを抑えながら、パトラッシュの毛並みをなげる。

時間が刻々と過ぎてゆく。それにつれて、月の光に作られた窓の

影も姿を変えてゆく。そして、アトリエの空気が再び、密になった時、

突然、キースの後ろに青白いような光が浮かび上がったのだ。

ウィリアムが、絵から出てきた……。

息を殺して、そつと後ろを振り返った時に、キースが見た光景は、今まで入り込んでいた”ヴァーシナルの前に婦人”の贋作から、外に出てきた少年が、オリジナルの絵の前に立ち、まさにその絵に入り込もうとする瞬間だった。

「今だ、行け、パトラッシュー!!」

こういう時のパトラッシュは、猟犬なみにターゲットを確実に確保する。少年がオリジナルの絵に入り込む寸前に、彼の体を押さえ込んだ相棒に視線を向けると、キースは、満面の笑みを浮かべて言った。

「残念でした。このオリジナルって言うてた絵も贋作。製作者は俺」

「嘘だ!! この素晴らしい絵が贋作のわけないじゃないか! この絵は、お前が僕を外の世界に出すために父からお金をもらって、ナショナル・ギャラリーから、盗んできた本物に決ってる! 僕を騙そうつたって、そうはいかないぞ」

すると、その言葉に若手画家はまんざらでもない顔をして、少年が入り込もうとしていた絵の右下を指差した。そこに書かれていたサインは、フェルメールのサイン、”Meer”ではなく、”K・L・V”（キース・L・ヴァンベルト）

「俺の腕を見くびるんじゃないぞ。別に盗まなくたって、オリジナルに負けない絵は描けるんだよ。それでも、贋作は贋作だ。ウィリィ、これで目が覚めたんじゃないのか。お前が今までフェルメールの絵だと思って入り込んでいた絵は、出来のいい贋作にすぎなかったんだ。お父さんが首を長くして待っている。だから、もう、絵の中に逃げ込むなんて真似はやめておけよ」

すると、キースの言葉を補うようにアンナも言った。

「そうよ。まだ、命があるのに、その魂を絵に封じ込んでしまうなんて、もったいなすぎるわ」

その言葉とともに、アンナはミルドレッドの中から出て行ってしまった。その直後に、がたと音をたてて、アトリエの窓が開いた。頬を通り抜けてゆく夜風が去る方向に目を向けた時、少年の視界にアトリエの窓の下に置かれた、少女の肖像画が入ってきた。

私みたいに肖像画の中からしか、この世を見れない者だっているんだからね。

頭の中に響く声と、肖像画の中から彼につぶらな瞳を向けてくる少女の姿に、少年は啞然とする。

「お前は悪い夢からやっと、目覚めたんだよ。だから、もうお父さんの所へ帰ろう」

キースは、そんな少年の肩を軽くたたいた。

## Chapter 22

パトラッシュが彼の頬を鼻先でちゃんと小突く。その時触れた中型犬のふさふさの毛のぬくもりに、やっと、少年は顔をあげ、

「でも……父は、本当に僕を待っていてくれるんだろうか」

「大丈夫。今日、ちらりと聞いた話では、グレン男爵はあの豪華な館を競売にかけたって話だから。男爵は贗作村だって、いずれはこの学園に権利を売却するだろう。俺も最初は、騙されてるんじゃないかって疑ってたかったりもしたけど、その話を聞いて、ちよつと、彼を見直しちゃった」

すると、今まで頑なに父親を否定していた少年の態度が、一変して、そわそわと落ち着かなくなってしまったのだ。

「僕、家に帰りたい」

けれども、時間は午前4時。外でタクシーを拾うにも、なかなか、難しい時間帯だし、おまけにグレン男爵の館までは、ピータバロ市から小1時間はかかるのだ。

高飛車なお嬢様・ミルドレッド・の声が、今度はきちんとミルドレッドとしての体から響いてきたのは、その時だった。

「そんなの問題なしよ。うちの家のお抱え運転手をたたき起こせばいいんだから。私が携帯をかければ、彼は、何時だって飛んでくるわよ」

アンナが入り込んでいる時とは違って、その態度はえらく傲慢で、キースは思わず苦笑してしまう。

「ミルドレッド、お前がセレブな小学生で本当に良かったよ」

「ちよつと、それって皮肉っぽくない？」

それでも、いつもと変わらぬ彼女の口調に、キースが、内心、ほつとしたのも事実なのだ。時折、アンナが見せる哀しげな表情とは

裏腹に、ミルドレッドの声には生きている輝きみたいなものが満ち溢れていたから。

「そんなことはないよ。心の底からミリーには感謝してる」

……と、その直後に、ミルドレッドの脳裏に、何ともいえない妙な感覚が通り過ぎていった。

あれ……？ 私、何かとても大切なことを忘れているような……。ここにいた少年がああ絵から、出てきたのを見ていた記憶は、あるんだけど。

そのとたん、

「キス！ 私、キスしてもらってない！！」

すっとんきょうな声をあげて、キースの上着の裾を引っ張ったミルドレッド。すると、若手画家は、胡散臭そうに少女の顔に視線を向けて、

「キス？ ミルドレッド、お前って意外とガキだったんだな。ちっちゃい子みたいに、そんなもんをして欲しいなんて」

「でもっ！」

泣き出しそうな顔の少女を見て、若手画家は、仕方ないなあと彼女に近づくと、

「ありがとう、ミルドレッド」

と、その頬に軽くキスをした。

「……」

納得ゆかない。何だか、私、もの凄く、子供扱いされてるし！

後々にこの彼の行動が、ミルドレッドの将来設計を大きく変えることになるのだ。けれども、この時点で、キースがそれに気づくはずもなかったのだが。



\* \*

空には雲もなく、夜明けを待つ間を惜しむように、明るい星々が、きらきらと瞬いている。

キース、ミルドレッド、ウィリアム、そして、パトラッシュ。

ピータバロ・シティ・アカデミアの正門前で、夜風に吹かれながら、ミルドレッドがチャーターしたリムジンを3人と1匹は待っていた。

それにしても、ピータバロ市の3月の気温といたら、この時間帯のせいもあって、真冬と違っていいほど冷え込んでいるのだ。

「この寒さ、どうにかならないの」

「もうちょっと待てよ。すぐにリムジンが来るから」

「それにすぐお腹がすいた。何ヶ月も絵の中にいて何にも食べてないのに、どうせ僕を呼び出すなら、食べ物くらい用意してくれてもいいじゃないか」

その少年の言葉に若手画家は眉をしかめ、

「ミリーが買ってくれた食料は、俺が賈作を作りながら全部食べちゃったし、お腹がすいてたって、そんなのは自業自得だ。寒かったら、パトラッシュにでも、しがみついたらいい！ ウィリー、お前、絵から出てきた方がいいが、ちょっと我ままだぞ」

やっぱり、金持ちのご子息ってのは、俺は苦手だと、自分の隣にいる”もつと金持ち”のご息女の方にちらりと視線を向ける。けれども、ミルドレッドは文句も言わずに、冷えた両手を揉み解している。そんな彼女の姿にへえと目を細めて、

「ミリー、寒い？」

「そりゃあ、寒いわよ」

すると、若手画家は油絵の具で汚れた手を少女の手に伸ばしてきた。ぎゅっと彼女の片方の手を握り締めて、自分の上着のポケット

にそれを突っ込む。

「これで少しは暖かいだろ？」

思わず、頬をピンクに染めたミルドレッド。ポケットの中の暖かさが頭の芯まで届きそうだった。その時、キースは、正門の向こうからこちらへ近づいてくるリムジンに気づき、

「ごめんな。ミリーをこんな時間までつき合わせたくなかったけれど……でも、もう少しだから我慢して。ウィリーをグレン男爵の元へ送り届けて、シティ・アカデミアが贗作村の権利を手に入れたら、俺はそろそろ動き出すから。贗作村は危険だ。だって、あの村には凶悪なチャイニーズ・マフィアが……」

ところが、前方から、花火が弾けるみたいな音が響いてきたのは、その時だった。

「ヤバい！！ 噂をすれば何とやらか！？ みんな、早く、リムジンの中に入るんだ！！」

あちらこちらから、乾いた音をたてながら、銃弾が飛んでくる。

ウィリアムを先頭に、ミルドレッド、キース、そしてパトラッシュは、ぎゅうぎゅう詰めになりながら、リムジンの後部座席へ飛び込んだ。わらわらと拳銃を手にした黒服が闇の中から姿を現してくる。それをリムジンの窓ごしにキースは睨めつけ、

「ほうら、言わんこっちゃない。贗作村とシティ・アカデミアの事をかぎつけたチャイニーズ・マフィアが攻撃をしかけてきやがった」  
「キース、どうするの！ 一体、どうすればいいの？！」

どうすればって聞かれたって……。

「とにかく、ここから逃げるのが先決だ！ 運転手さん、リムジンを走らせて！！」

けれども、彼らよりもっと事の方が把握できず、慌てふためいて運転手がアクセルを踏もうとした時、車体の前に銃を構えたチャ

イニーズ・マフィアたちが立ちほだかってきた。

黒服の男たちが、手に銃を構えながらこちらへ近づいてくる。

「それは、グレン男爵が探していた息子だな。それと、好都合なことに、カーンワイラー氏のご令嬢まで一緒か」

キースは、両手にミルドレッドとウィリアムを抱えこんで、ぎゅっと唇をかみしめる。

ウィリアムとミルドレッドは、とりあえず、人質として生かされても、俺やパトラッシュや運転手は、即座にここで撃ち殺されてしまふぞ。けど、俺はまだこんな所で死ぬわけにはゆかないんだ。

どうする？

そんな質問をお互いにぶつけ合うように、キースとパトラッシュは目と目を交わす。

……と、彼の相棒が、

わおんと、一声、大きく鳴いた。

すると、

突然、空から、ごろごろと雷鳴が鳴り響いてきたのだ。

ほどなく、バケツをひっくり返したような大雨が降ってきた。

「な、何だ、ゲリラ豪雨か!？」

轟音を伴った光が、天から落ちてきたのは、キースが、窓の外に目を向けようとしたその瞬間だった。夜を切り裂きそうな閃光が、

正門横の大銀杏の木を直撃する。

銀杏の木が焦げたきな臭い匂い。けど、今日の天気予報では、雷どころか、雨が降るなんて少しも言っていなかったじゃないか!

辺りに静けさが戻った時、  
落雷の音と光に頭の芯が痺れたままで、キースは、恐る恐るリムジンの扉を外に開いてみた。

「だ……大丈夫なの」

ミルドレッドの声を背中に受けながら、銃弾が飛んでこないことを確認し、キースはリムジンから外に降り立つ。すると、

「おい、パトラッシュ……俺、おかしい夢を見ているのかな」

先ほどの大雨が嘘のように、外は晴れわたっていた。おまけに、夜空には星々が瞬き、白い月が煌々と輝いている。

けれども、雷が落ちたらしい銀杏の木の周りには、気を失ったチャイニーズ・マフィアたちが、ばたばたと倒れていたのだ。これは……やっぱり、現実なんだ。

するとその時、けたたましいエンジン音が響いてきたのだ。

まだ夜が明けきれぬ冷気の中に佇む、一台の黒塗りのバイク  
ゼファー1100 -

そして、それに乗った黒いジャケットの男。

「あつ、イヴァン！」

その少女の声に答えるでもなく、赤みかかった灰色の瞳で彼らに向ける。その直後にヘルメットを装着し、くるりとUターンをして走り出したバイクのライダーに、ミルドレッドが手を振る。そんな彼女に訝しげな目を向け、キースは言った。

「あいつ、何で、こんな所にいるんだ。それに、お前……親しげにしているけど、分ってるんだろうな、あいつが殺人鬼だってこと」

「殺人鬼？ 何それ」

「だって、ミリーだって見てたんだろ。お前を助けた時、奴がチャ

「イニーズ・マフィアを殺ったところを」

「キース、あんた、何言ってるの。もしかして、あの時にあんまり怖い思いをしたんで、後でおかしな夢でも見たんじゃないの？」

ミルドレッドは、イヴァンに助けられたことは覚えていても、その後の惨劇については全く、記憶にないようなのだ。

イヴァン・クロウ……

さっきのゲリラ豪雨や、雷といい……あの男が現れる場所には、おかしな事ばかりが起こる……。

だが、その時、くわんと吠えたパトラッシュの声に、キースは、はっと我を取り戻した。幸い、チャイニーズ・マフィアたちは気を失っているだけらしい。面倒が大きくならないうちに、さっさとウイリアムをグレン男爵の所へ送り届けてしまわなければ。

## Chapter 23（最終章）

キースはミルドレッドに、

「俺は、グレン男爵にウィリーを送り届けたらすぐに戻ってくるけど、ミリーは、早く、パトラッシュと一緒にアトリエに戻るんだ。じきに落雷の騒ぎを聞いて目を覚ました人が集まってくる。ここに倒れてるチャイニーズ・マフィアのことを色々と詮索されると、後が面倒だろ」

「ええっ、私も一緒に行きたいのに」

「駄目、駄目。大人数で行ったらかえって目立つちまうじゃないか」

ミルドレッドは小さくため息をつく。けれども、リムジンの後部座席から不安げな視線を送ってくる少年に目をやってから、

「……仕方ないわね。ウィリアム、元気でね。心配しなくても大丈夫よ！ キースは普段はぼうっとしてても、やる時はちゃんとやるんだから」

「おい、誰がぼうっとしてるって？」

眉をしかめて、セレブな小学生に一瞥を送る。けれどもその後、

“あ、それと”と、前置きしてから、

「アトリエに残してある二枚の贋作はレイチエルに見せないように隠しておいて。帰ったら、俺はもう一仕事やるつもりだから」

「もう一仕事って……？ いったい、あの絵をどうする気？」

「もう一度、ウィリーが出た絵の中に少年の姿を描き込むのさ。もちろん、これから会うグレン男爵には、俺が彼の息子を絵の外へ出

した事は伏せておいてもらう。レイチエルには、世にも稀な少年の入り込んだ“ヴァージナルの前に座る婦人”と、俺が描いた贋作の2枚を手渡しておけば、甚く満足するんじゃない」

何だか嬉しそうに、そんなことを言う若手画家を見やって、ミルドレッドは眉をしかめた。

「でも、あの女、その2枚の絵を使つて、また、性質の悪い商売を始めるかもしれないわよ」

「願つたり敵つたりだ。贋作村の権利を得ることも然り、いずれはあの女は、俺に上手く作らせたと思ひ込んでる贋作を過信しすぎて大失態をやらかす。それを俺は待っているんだから」

なつと、パトラッシュと犬の頭をなざると、キースは、リムジンに乗り込む寸前にくすりと笑つてこう告げた。

「それが贋作者のテクニクつてもんだよ」

\* \*

3カ月後、

約束どおり、グレン男爵は、彼が取り仕切っていた中国の贋作村の権利をすべてピータバロ・シティ・アカデミアに譲渡する契約を結び、おまけに、資産の一部だけを残して、館も手広く展開していた事業もすべて手放して、ウィリアムを連れ、自然の豊かなスコットランドの小都市へ引越していった。

女教師レイチエルといえば、贋作村を新しく経営する細々とした事務手続のために、まともな者から怪しい者まで、各種の関係筋を飛び回っていた。その成果もあつてか、あの突然の落雷があつた未明に現れた、チャイニーズ・マフィアはびたりと成りを潜めていた。

「けどさ、あの日以来、ロンドンの街中を騒がしていた”連続切裂魔事件”までがぴったりと止ってしまったんだから驚くよな」

朝日がまぶしく差ししてくる、シティ・アカデミアの自分のアトリエで、相棒のパトラッシュにそんな風に話しかけながら、キースは手にしたタブロイド紙の記事を隅から隅まで探してみた。

「やっぱり、どこにもそんな話題は載ってないなあ」

イヴァン・クロウ……。ゼファー1100のスピードのままに咽喉を切裂いてくる連続殺人犯。

「あいつもグレン男爵みたいに、どこか、別の街に行ってしまったんだろうか。そりゃあ、殺人犯が町からいなくなるっていうのは有り難いことだけど……」

少し気がぬけたような気分で、入れたばかりの珈琲をすする。

ってことは、用心棒になってくれるっていう俺との契約は、もう、なしってことなのかよ。

そんな風に考え込んでいた時、

「キース、ミルドレッドが発券するから、早く玄関に出てきてよって！」

アトリエの向こうから、シティ・アカデミアの生徒の声が響いてきた。

「いけね、もうそんな時間だったのか」

と、キースはパトラッシュを伴って、足早にシティ・アカデミアの正面玄関に向かっていった。つい最近、ミルドレッドから、聞かされた突然の話には彼も驚いてしまったのだが、彼女は絵の勉強のために、これから欧州を中心に世界各地を歴訪するのだそうだ。



何でまた、そんな壮大な計画を思いついたかは知らないが、彼女の家にはふんだんな資金もあるし、美術に関しての広いコネクションも世界中に持っているんだから、まあ、良いのか？ と、キースは思う。それに、いつ、あのチャイニーズ・マフィアがまた、暴れ出すかもしれない。こんな場所にいるより、外に出ている方がずっと安全かもしれないし。

キースとパトラッシュが、シティ・アカデミアの正面玄関に出てきた時、ミルドレッドが乗った黒塗りのリムジンは、すでに沢山の見送りの生徒たちに囲まれていた。

「キース、パトラッシュー！」

彼らの姿を見つけたミルドレッドが、リムジンの窓越しに大きく手を振る。それに答えて、若手画家は小走りに彼女の元へ駆けて来た。

「ミリー、急な話で驚いたけど、元気で。最初に行くのはフランスだって？ 羨ましいな。また、色々話を聞かせてくれよ」

くわんと窓越しに頬をよせてきた、パトラッシュの頭をなぜながら、ミルドレッドは、華やかに笑う。

「キースも元気でね。グレン男爵から譲渡された贗作村を実際にうちの学園が経営するには、まだ時間がかかりそうだけど、レイチェルを出し抜こうって絶対に無茶はしちゃ駄目よ。私もなるだけ色々な情報を集めてきてあげるから」

その言葉にキースは少し眉をひそめ、

「お前こそ、危ない真似はするんじゃないぞ……で、いつ頃、帰ってくる予定なんだ？」

「次に帰ってくるのは……3年後よ」

「えっ？」

淡々と言ったのける、黒髪的美少女に、青年画家は驚いたように琥珀色の瞳を向けた。

「……でも、一時帰国とかはするんだろ？　その時は連絡くれよ。俺、空港まで向かえに行くから」

その時、ふと、以前に彼女から聞いた話を思い出して、

「そういえば、ミリー、お前って、前にアラブの王族の息子がどうのって言ってたけど、あの話は、いつたい、どうなったんだ？」

「あら、覚えてたの？　今回、最初に行く国をフランスに決めたのは、その息子からの招きがあったからなのよ。彼、今、あちらに留学中なんですって。意気投合しちゃったら、もしかしたら、3年じや帰ってこれないかもね」

戸惑ったような青年画家の顔。ミルドレッドは、その反応にちょっと嬉しいような気分になった。そして、いたずらっぽい笑みを浮かべると、窓から身を乗り出し、じゃあねと、その頬に軽くキスをした。

“次に帰って来た時には、こんなもんじゃ済ませないんだから”

キースにとっては意味不明な台詞を口元で呟いてから、ミルドレッドは、彼に右手を差し出し、

「私、この機会に外で色々な物を見たり、聞いたり、もっと、もっと、今の自分に足りない物を補ってくるわ。だから、キースも頑張ってね。そのためには少しくらい時間がかかっても構わないじゃない。焦らずゆきましょう。きっと、私たちは上手くやれるわ。そして、ピータバロ・シティ・アカデミアを手に入れるの」

キースは、へえと驚いたように、リムジンの中から黒い瞳を向けてくる少女の顔に視線を向ける。

6月の朝の日差しが明るくミルドレッドの頬を照らしていた。3ヶ月前の寒い夜明けに、絵の中から抜け出てきた少年と一緒に、この場所でリムジンを待っていた彼女より、ずっと凜としたその表情。

「そうだな。けれども、俺はそう長くは待ってられない。なら、俺はミリーが帰ってくるまでに、色々な段取りをそろえて準備万端にしておくよ。だって、レイチエルが色々動き出しているこの機会を黙って見ているわけにはゆかないだろ？」

ミルドレッドが差し出した右手を、自分の右手で握り締めると、キースはこう問うた。

「なあ、ミルドレッド、俺がこの学園と契約した時に言った言葉って、お前はまだ覚えてる？」

動き出したリムジンのせいで、ミルドレッドにはその答えを返すことができなかったが、リムジンの後を追って走ってゆく、パトラッシュの姿を見つめながら、

「俺は、将来、ピータバロ・シティ・アカデミアと王宮美術館を手に入れる男なんだってこと」

青年画家は胸はすくような笑みを浮かべて、そう言った。

ピータバロ 〽贋作者のテクニク〽 (完)

## Chapter 23 (最終章) (後書き)

\* \*

とりあえず、ピータバロ3、完結しました。次回は3年後からのお話になりますが、鷹作村を中心に、サスペンス色を濃くして書くつもりです。ちよっぴり大人になったミルドレッドとキースは、ピータバロ・シティ・アカデミアを手に入れることができるのか。その結末はピータバロ4で明かされる…かな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2194m/>

---

ピータバロ3 贗作者の技術（テクニク）

2011年6月30日16時18分発行